Round ZERO　【ゼロとWな転生者】　《試験投稿中》

HOT RIDER

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｒｏｕｎｄ　ＺＥＲＯ　【ゼロとＷな転生者】　《試験投稿中》

【Ｎコード】
Ｎ９１２４Ｚ

【作者名】
ＨＯＴ　ＲＩＤＥＲ

【あらすじ】
物語の守護者から突然言い渡された「転生」…タンクローリー爆発事故によって死んでしまった２人の仮面ライダー大好きなファンの男女、佐久弥立花と及川優梨子が転生したのは…ハルケギニア、所謂「ゼロの使い魔」の世界だった！？

2人の転生（ビギンズデッド）（前書き）

…これは無性にゼロ使が書きたくなった作者の無謀な挑戦物語…。
原作は呼んでいる…が、あまりに覚えることが多いので自分うまく書けるか不安です。
主に原作知識の方面でアドバイスをもらえたらありがたいです。

2人の転生（ビギンズデッド）

英雄（ヒーロー）…男の子であれば大半の者は憧れ、敬い、中には嫉妬するものもいるであろうか。
弱者を大いなる巨悪から身を呈して守り通し、時には孤独に打ちひしがれ、苦悩し、痛み、その先にバッドエンドが待っていようが信念を貫き通し戦う…その背中に誰もが心打たれ、時にはほろりとすることも。

仮面ライダー…このヒーローもまた心の中に生き、現代も子供達の心に勇気を与えている存在の1つ…いわゆる特撮ヒーローだ。
「異形」という仮面を被り、孤独に身をまかせながらも愛する「人達」のために戦うバイクにまたがった英雄…平成の世に入ってからは初代から続いていた「改造人間」という要素は姿を見なくなり、「仮面ライダークウガ」、「仮面ライダーアギト」は突然もたらされた「人外なる力」を持ってしまった人間が、「仮面ライダー龍騎」や「仮面ライダー555」は「大きな力」を持った人間達の正義を貫き通す話となっている…時に「改造人間という要素は消えるべきでなかった」という意見も聞こえるが、この平成の傾向は「大きな力がもたらす結果」というものをまざまざと見せつけられており、ある意味昭和ライダーよりも「人の中にある正義」というものを強調されているのではないか?とも思える。

…そんな「仮面ライダー」というビッグタイトルが好きで止まない男女が2人…とあるオフ会の帰りにカラオケに寄り、その後とあるショップで「仮面ライダーオーズ」に出演する怪人の「ウヴァ（さん）」のフィギュアーツを買った後に帰路についている男女…男の名は佐久弥（さくや）立花（たちばな）、女の名は及川（おいかわ）優梨子（ゆりこ）である。

この2人は2年前、どこぞの「753オフ会」というオフ会で出会い、その後親交を深めた…現在はお互いに「仮面ライダー」が好きな…今は親友である。
お互い名前に引っかかるところと、「仮面ライダー龍騎における各仮面ライダーデッキ所持者のキャラクターの相関性について」とも何とも小難しい議論で息が合い、その後はカラオケで仮面ライダーの主題歌を歌い尽くし、はたまた某レストランで「RXステーキ」を食べたり…と、オフ会仲間からもよく「恋仲」ではないことをからかわれるほど仲睦まじいのだが、彼らいわく「兄妹でいる気分」らしく、そういった恋仲にあることは想像できないという…まぁ、その発言に特に冬とかには嫉妬の一言を浴びせられるのだが。

「スイッチはどれくらい集まりましたか?」
「俺は12個…でも40個ってなるとかなりきついよね。」
「そうですよね。私はまだフリーターの身なんでまだ8個ぐらいしか。」
「今はしょうがないさ、やるべきことを終わらせた後にゆっくり楽しめばいい!」

サムズアップ、仮面ライダーが好きなものとしては一種の挨拶ともなっている…と立花いわく…真実であるかは定かではない。

フリーター…とはいっても、決して彼女がだらしないわけではなく、彼女は現在司法試験に向けて絶賛勉強中なので色々としょうがないといえる。
彼女の夢…それは「司法の面から正義を貫き通すこと」…過去に父親と一緒に見た仮面ライダー…その正義のために拳を振るう姿に幼少の気持ちはただただ感動し、いつかは生き方にも反映された。
それはここにいる彼も同じ…彼の仕事は警察官、現在は巡査として街の交番の顔となっている。

こうして「仮面ライダースピリッツ」は受け継がれていく…創始者であるあのお方も天からそんな「正義を愛する心」を見据えて笑顔でいるであろうと願いたい。

そしてその魂を持つ2人が…この直後、とある事態に直面し、そしてそこから人生を365度しっくり変えるような事態になるなど…この時誰が思っていたであろうか。

キキィーーーーーー！！！

突然聞こえた甲高い…これはタイヤが道路に擦れる音だ、そしてその後に続く何かが倒れたような轟音。
そして2人が轟音に気を取られ振り向いたときには…どこかで見たようなガソリンスタンドのマークが描かれているタンクローリーが…道路で横転していた。

「車が爆発するぞぉーーー！！逃げろぉーーー！！」

その方向から聞こえる叫び…おそらく車を運転していた運転手であろうか。
だが2人には衝撃的な光景が見えた…横転し、歩道までに出てしまったタンクローリーの巨体に…足を挟まれ、助けを請いながら涙を流している女児がいたからだ。
周りには誰もいない…おそらく「爆発」という単語に恐れおののいて逃げ去ったのであろう。
「臆病なぐらいがちょうどいい。それのほうが長生きする」と某探偵は言っていた…だがとある青年はこうも言っていた…「やらない後悔よりやる後悔のほうがいい」」と…。
立花と優梨子はその場に荷物を放置し、いつの間にか体を動かして

いた。
彼らの正義の心が「その少女を助ける」、ただそれだけのために全神経を使い彼等はそれに身を任せていた。
「蛮勇」と言われればそれまで、「無謀」と言われればそれまで…だがもしこれで自分達が死ぬ結果になろうと…もしその行動で目の前にある「命」を助けられれば後悔はない…おそらく彼等はそう思っている。
「手を伸ばさなかったら絶対に後悔する」…とある無欲な青年の言葉を心に繰り返し、彼等は今にも漏れ出たガソリンの炎がタンクローリーの中にあるガソリンに引火しそうな中…その少女の元に辿りつき、少女を助けようと努力した。
だが何トンもある巨体、立花が素で「青春フルパワー！！」などと叫び力を込め巨体を動かそうとするが…彼等はれっきとした人間、その巨体を動かせるはずがない。
ダイナマイトの導火線を彷彿とさせながら火は迫る…そしてその炎が完全にガソリンタンクの元へとたどり着いたとき…立花と優梨子は同時に同じ行動をとっていた。
それは少女に追いかぶさるように身を呈した爆発から守ること…優梨子が最初に少女をかばい、その2人をかばうように立花がかばう。
…無情にも大量のガソリンに引火、そのタンクローリーは周囲に被害をもたらしながら大爆発を起こした…その後、少女はどうなったのか、立花と優梨子はどうなったのか…しばらくは、その「無謀ながらも勇気は持っていた」2人はその真実を知る由はなかった。

＊＊＊

…白い、とはいっても絵具や色鉛筆、クレヨンやクーピーのようなチープな白ではない。
これは存在しない白だ…周りには文字どおりに何もなく、ただただ「無」が広がっているのみ。

…もしやと思いきや、その空間にはとある男女が2人…、無論、立花と優梨子だ。
2人は先ほどこの空間に自分達がいることを認識し、なぜこのような場所にいるのかを思案していた。
そもそも自分達はあのタンクローリーに足を挟めてしまった少女を助けようと尽力し、結局自分達が身を呈しその少女をかばった…だがそれ以降の記憶については全く覚えていないし…そもそもこの空間は、自分達にある「人間的本能」が訴え続けている。
ここは人がやすやすと入る場所ではない…ここは世に「存在していない」世界であると…。
なまじそういった方向の文化に関して詳しい2人は…まったく同タイミングで同じ言葉を発した。

「「まさかここって…死後の世界!?私聞いてない!?」」

御丁寧にお約束のセリフまで言い、そこで笑いだす2人…だが死後の世界と認識して、ここまで楽天的な人間はそんなにいないであろう。
と、そんな2人に迫る人影、その人影はどこか幻想的な雰囲気を纏わせながら、ふと2人に現れた。
そして2人はその顔を見た瞬間…驚愕した。

「「紅渡（くん）！?」」
「初めまして、おそらくあなたがたが知るであろう紅渡です。」
「瀬戸康治さんってことはキバかディケイドの撮影!?…なわけないか。」
「随分とお二人は理解力がお有りで…。」

と、紅渡が言うが、この空間は余りにも異質だし…何より2人は自分が感じている「感覚」がないように感じられた…生きている人間

なら感じる体が「存在している」感覚、それがいくらどうこうしようが感じられない…そして記憶が知る限りおそらくあの後死んだであろう状況…走り出したときから覚悟はあったので、後悔はなし…それよりも2人には気にかかることがあった。

「あの！最後に私がかばったあの子は！？」

「…あの少女なら、あなた方の尽力により足を大きく負傷しながらも一命を取り留めました。いや、あなた方の行動の勇気には感服いたしました。…しかし、同時に愚かでもあった。あなた2人の物語の終わりは、周りに悲しみを残すこととなるでしょう。」

渡の言うことはもっともである…おそらくあの子が足を挟め、その場で爆発に巻き込まれることは皮肉ながらも「運命」ということであったのだろう。

だがその「運命」に介入者が2人入ったことにより、1人の終わりであったはずのその事故は2人の終わりとして集結した…その分、降りかかってくる悲しみは大きい。

「…けど、いいと思うけどな。」

「…あなた方は本来死ぬべきではないところで死んでしまった。それでも、ですか？」

「それでも。人は遅かれ早かれ死ぬんだし。それに…あの時、最低でも俺は思った…〝ここで手を伸ばさなかったら絶対に後悔する〟って。ずっと後悔しながら生きるなんて俺はいやだね。」

「それは私も同じ。…そりゃ、少しぐらいは未練はあるかもしれないけど、それでも、私の信念に従っただけだから、私はこんな終わり方でも後悔しなければ万々歳！」

「…信念…とは？」

「「仮面ライダーのように…なんて言わない！人間として、正義に生きる、絶対に！」」

それは彼らがいつも合言葉としているモットー…お互いに人を守ることを信念としてきた。
そしてその思いを果たすことができた…最期の最期に、だ。
彼等にとっては一番清々しい、とも言えるかもしれない…現世に残してきた者達の悲しみは彼等もつらいところはある、だがそれを乗り越えて生きていく人間の強さも「仮面ライダー」という物語に生きていた人たちの群像劇で見てきたのだ、決して彼等は絶望しない。

「…やはり、あなたがたがこの世界の狭間で偶然残留したのも…因果、だったのですね。…いきなりですいませんが、あなた方にはとある世界に”転生”してもらいます。」
「転生!?それは本当か!」
「ええ。…僕は世界の物語を守りし存在。あなた方という”異分子”にははにはその世界に紛れ込んでしまった”悪の異分子”と戦ってもらいたいと思います。」
「…なるほど、”異分子”には”異分子”ってことね。」
「その通りです。…本来ならばその異分子を叩く仕事はほかの者が受け持っているのですが、現在彼はほかの大仕事で忙しいのです。…本来ならば一般人の助けを求めるのは心苦しいです、しかしこの次元の狭間に迷い込んだのも何かの縁、ぜひともあなた方にはその世界で新たな人生を歩み、その世界で戦ってほしい。お願いします、もちろん、あなた方がよければ、の話ですが…。」
「…もしそれを断れば、俺達はどうなるんだ?」
「そのまま生命の輪廻の一部となり、魂をリセットされてその魂はまた新しい命となる。…いわば普通の人達と同じです。」
「…よし乗った!」
「いいのですか!?」

まさかこんなに早く、それも即決してれるとは思っていなかった渡、

自分からその「戦い」に殴りこむ…勇気がいるし、話の筋からおそらく「異世界」であると理解しているはず…右も左もわからない世界で生きることを容認する…これも勇気がいることだ。

「その話から、おそらくほかの候補者もいるとは思う。だが他の人に押し付けるってのも俺としては気が乗らないんだよ。…おそらくその話の筋だと、その異分子は危険なんだろ？」

「ええ。その異分子はその世界の正史を破壊し、さらにはその世界の理すべてを破壊します。」

「いいじゃん、その世界を守るヒーローってのもさ。」

「そうよ！でも自分を過信しているわけではない。危険なのもわかる、けれど…その危険に立ち向かって、人を守ってきたヒーローの背中を私たちはずっと見てきたから、それに及ぶかは分からないけど…でも、自分で出来ることなら！」

「…感謝します。ですがその世界では危険が待っているのは必然。さらにはあなた方が住んできた世界とはまったく仕組みが違いますから。」

「どんな世界なの？」

「…ゼロの使い魔、という小説は御存じでしょうか？」

「ゼロの使い魔って…あのゼロの使い魔！？」

「まさかどこかのネット小説みたいなことになるとは…不思議だなぁ、まったく。…てことは、なるほど、魔法の世界か。」

魔法…ゼロの使い魔の世界は各々が抱いているような魔法と大差はない。

火を放ち、傷を治し、突風を起こし、金属を作り出す…貴族と平民という2つの枠組みが存在し、地球で言う中世のヨーロッパの世界を再現したような世界…魔法、ともなると確かに危険は付きまとう、あそこの世界には亜人やドラゴンといったモンスターも存在するし、今の平和な日本より何百倍も危険な世界だ。

「その世界であなた方はとある貴族の双子として転生してもらいます。」
「ふ、双子!?まぁ、2人同時ってのは納得できるが…。」
今まで仲が良かった親友が突然自分と地を分かち合う双子となった…なんてノスタルジーでなんて唐突でなんと奇妙な話であろう。…が、ド天然である上で超ポジティブスキルを持っている優梨子からしてみれば…
「何それ面白そう!」
「…言うと思った。」
まぁ…立花の中では優梨子は親友というより妹みたいな存在であったし、決して恋感情とか持ったことはなかったからまだ気まずいことはないであろう。
「…そして、あなた方にはその”救世の戦士”となるべくスキルをいくつか与えます。…ですが、それの他にも御所望したものが2人にあれば…1つだけなら。」
能力付加、というのはもはやお約束であるし自分達はその異分子とやらを倒すために転生するのだから納得できる。
それにプラスとして特典も付けてくれるのだからありがたい…と2人は模索していると、ふと目が合い…そのアイコンタクトでお互いの意思を確認すると、2人は一糸間違えぬ息で同時に述べた。
「「Wドライバーとガイアメモリ!」」
「…なるほど、2人で1人、中睦まじいですね。…一応聞きますが、ロストドライバーは?」

「「あ、ほしいかも。」」
「…それも付けておきますね。ですがその存在自体は秘匿をお願いします。」
「まぁだろうな…。」
「それが原因でドーパントなんかだ出てきちゃったら私も困るし。」
その暁には2人の探偵事務所が建ってしまう事態になるであろう。

「…それでは、出発の時のようですね。」

そう渡が宣言すると、2人の背後に突如銀色のオーロラが現れる。
これも理解している…仮面ライダーディケイドに出てくる異世界への扉だ。

「…それでは、自分から頼んでおいて、というのもなんでしょうが…どうかご無事で。」
「…ああ。」
「もっちろん！」

ただのその会話だけを交わし2人は…揺らめくオーロラの中へと勇気を持って足を踏み入れた。

それを見届けた渡…と、小さなオーロラ越しからとある世界の様子を確認していると…渡のポケットから、彼の相棒である蝙蝠…キバットが姿を現した。

「渡、そんなにあいつらのことが不安か？」
「…あの方たちに必要な力は与えました。ですが…。」
「偶然見つけただけの一般人にすぎない。確かに、あのお願いを引き受けてくれのは超ラッキーだった。…お前も、実はあいつらたち

が良かったんだろう？」
「…彼らが見せてくれた勇気、僕が言ったようにあれは無謀だった…けれど…。」
「心を打たれた。…それでいいと思うぜ。渡はあいつらの正義の心に、その無謀ともいえる勇気に感動した、それに、あいつらだったら全力で頑張ってくれると俺は思う！」
「…そうだねキバット。最低でも自分の身を守れる力は託したから。…苦戦してるようだね、行くよキバット！」
「よっしゃ！キバって行くぜ！…ガブッ！」

彼もまた正義を愛する仮面ライダー…人の中にある「音楽」を守りたいと願い、守りとおした戦士…仮面ライダーキバ。

そして…正義の系譜は…。

「おめでとうございます奥様！男女の元気な双子ですよ！」

とある貴族の家に響いた…元気な産声から、物語は始まる。
舞台はハルケギニア…魔法の世界の物語の始まり。

ブレイ家の双子

ブレイ家…「ルクセン・アル・スペー・ド・ブレイ」の代から続く比較的新興貴族であり、領地も…広大である、とはいえない大きさ、いわばあまり力のない貴族の部類に入るが、農耕に至っては順調であり納税の面に関しても安定している、借金もなし…平穏である、というのがこのブレイ家であろうか。

貴族の中には領地の管理、村民の管理を厳かにするものも見受けられるが、このブレイ家…少なくとも、現在の代である「ヤン・ソンボルト・ノーク・ド・ブレイ」子爵はそういった部類ではなく、むしろ領地民からの信頼はとても厚い、彼は類を見ない努力家でもあり、同時にちょっとしたカリスマも持つ一定の「実力者」である。

そんなヤンの妻は「メリー・ヴラ・ド・ゲート・ブレイ」は献身的な妻…少しドジな面がありつつも周りにのほほんとした雰囲気を一瞬にして作り出すある意味カリスマ…そんな妻の存在がヤンの努力の力となる…と、同時にこの夫婦は砂糖にはちみつとチョコソースをかけたように甘い空気を作り出す、それは現在でも、そしてこれからずっと変わらないであろう。

…そんな仲睦まじい夫婦の間にもついに新しき命…次なる世代の鼓動がやってきた。

その命は…双子、その情報を聞いたときはさすがにブレイも迷ったが。

双子…もしどちらも男児であったら、おそらく遠くない未来に後継ぎ騒ぎが起こる可能性大であるからだ、幸い自分の家系は王族ではないがそれでも貴族での後継ぎ問題は実にシビア、特に双子というものは面倒なことになる可能性は特大。

新しき命には大変申し訳ないが、ここは男児1人、女児1人、というベストな配置でいてほしい…女児2人、というのも色々と面倒で

はあるが。
こうして念願かなってやってきた出産日…ヤンが当日メリー以上にどたばたしながらも…無事、新しき命の産声は上がったのだった。
嬉々迫るヤンはその愛おしき子供の顔を確認すると…1人は女児、1人は男児…と、ヤンが願ったようなベストカップルでその顔を現してくれた。
もちろん新しき命は大歓迎であるし、何より未来の不安の芽が1つ減ったことにヤンは狂信者ではないにしろ始祖ブリミルに感謝した日である。

――――――4年後、正確には4年と半年が過ぎた頃合…今年の農耕の調子を書類と見聞で確認するヤンの書斎室に不意とノックが響く。
ドアの比較的下側から響くノック…となると心当たりは2人しかいなかった。

「入っていいぞ。」
「しつれいします、おとうさま。」
「おじゃまいたします、おとうさま。」

ほかでもない愛おしき息子、その子独特の黒髪と金の瞳を持つ「ブレイブ・ノクト・トー・ド・ブレイ」と愛おしき娘、メリー譲りのきれいな緑の髪と銀の瞳を持つ「リリウム・フリー・ド・ブレイ」である。
…ヤンいわく「この子の将来が楽しみ」と言われている、ヤンいわく「才がある努力家」である自慢の娘息子。
どちらも1歳半からしゃべり始め、わずか半月でしゃべりをマスター、さらには3歳を過ぎた頃には魔法関係の書物を主に興味を持ち始め、さらにはヤンの愛読書である領地管理学の本も滅入るように

読み始めた、驚くべきはその内容を幼少の子供とは思えないスピードでマスターしたこと。
赤ん坊のころからどこか異質な、こう、落ち着き過ぎている雰囲気を持っていることは「各々の性格」と理解できた、だがどちらもこうして４歳とは思えないほどの学習能力と、何より態度だ。
わがままも言わず、だだをこねることもなく、時にはヤンの領地偵察に自分から同行すると…こうなると、ヤンにはあと半年ほどである「杖契約」つまりメイジとしてのデビューが楽しみでしょうがない、おかげで大量の魔法関係の本を買ってきてしまったほど…親バカである、だからこそこう「子供ぽくない」子供たちにどこかさびしさすら感じているのだが…。

「ほんじつはりょうちていさつをどうこうさせていただくべくまいりました。」
「わたしはあたらしいほんをかりにまいりました。」
「子供達よ…確かに少し前に”父として敬うように”とはいったが…こう、なんというか、他人行儀?な言葉使いもやめてくれないか?なんか…お父さん、拗ねちゃうぞ?」

親バカである…本当はコミュニケーション能力も大事な貴族にとって重要な「順能力」に長けているためほめるべきところなのだが…だが、気持ちも少しだけわからなくもない。

「りょうかいしました。それではこういうかんじでよろしいでしょうか?」
「…それ、変わったのかい?」

…まぁ、こういったリリウムの超マイペースな部分に癒されることもあり、ヤンの心は荒れているわけではない。
むしろ、このマイペースでのほほんとしている雰囲気に妻の影を感

じまたおそらく本を読んでいるであろうメリーのことを愛おしく感じるわけだが…。
メリーは現在病を患っており、絶賛療養中のみである…水のメイジの見立てでは、後1年弱は魔法と薬による治療によって感知するらしいが、それでも妻が大好きでしょうがないヤンは不安で不安でしょうがないのだ。
だが、それが理由で領地管理を厳かにした…ということになれば笑えない、今は元気がない妻のためにもヤンは一層と奮迅するのであった。

「…しかし、そうか、もうそんな時間か。」
「おとうさまはさくやからごむりをしているようすだそうで。エイからききました。」
「…無理、か。まぁ、徹夜はしていたが…。」
「それならほんじつはおやすみになっては。ほんじつはリリウムとおべんきょうをしていますので。」
「…ブレイブのいうことも一理あるか…すまん、それでは今日の視察は中止とする。ただし、この前みたいに熱中し過ぎるなよ?」
「「こころえました、おとうさま。」」

そう言葉を残し愛おしき子供達は自分達の部屋に帰還した。
…だが最後のまるでメイドみたいない返事はヤンの心にはどうしてもひっかかった…いや、父を尊敬していることはわかるのだが…。

「…私はそんなに信用がないのだろうか?それとも…パパとの時間が少なかったせいで見切られた!?パパンショーック!?」

…過敏すぎるのも問題である。

＊＊＊

ここはブレイ家の一角にある子供部屋…とはいっても通常の子供部屋よりはサイズが広い。
それもそうだ、ブレイ家の子供は双子、２人ということは自然と部屋も広くなる…とはいっても、どうみても２人部屋にしても広いのが現状…さすが生粋の親バカ夫婦である。
さらに目を見張るは部屋の一角にある本棚の特大な大きさとそれに見合う本の多さである…一応歳相応の子供の玩具はそんざいするがそれもかなり、いやほとんどない。
ここにいる２人の子供は…転生者、ブレイブは生前は佐久弥立花で、リリウムは及川優梨子、生前の精神年齢を加算すれば彼らの精神年齢は２９歳…とはるかに上をいっている、なので５歳児が興味を持つ玩具に興味を持つ歳でもないし、さらにいうならここは異世界、それも彼らの時代で言う「中世のヨーロッパ」に近い世界…玩具もどうも古臭いものばかり。
消去法で彼らの暇つぶしといえば…前の世界ではなかったような本、しいて言えば魔法関係の書物や貴族における領地管理関係の書物などぐらいしかなかったのである…おかげでたいていの呪文のスペルは頭に入ってしまっているが。
…今日は専属メイドであるエイも故郷であるタルブへと里帰りし、代役のメイドも厄介途中、現在この部屋およびこの部屋の周囲はこの２人だけである。
…だが念には念のため、リリウムはベッドの奥の奥、さらには簡単な仕掛けを施した小物箱から自分の手せいである簡易的な杖を取り出し「サイレント」…周囲に音を通じさせないコモンマジックと同レベルである風属性の魔法を唱え完全防備となった。
これは彼女の能力の一端「魔道具の作成スキル」から作ったもので、リリウムいわく「本を読んだら簡単にできた」だそうだ。
とはいっても簡易的なもの…契約を介さないいわば「量産品」なのでせいぜいコモンマジックぐらいでしか精巧に発動できないが。

しかしなぜ魔法まで唱えてまわりに警戒するか…これからの2人の話は「転生者」としての話となるからだ。

「…で、どうするの？物語に介入する？」

物語に介入…つまりはこの「ゼロの使い魔」という世界でこれから起こるであろう出来事に介入するか…ということ、「物語（ライトノベル）」としてこの世界を把握している転生者だからこそできる荒業である。だがこの世界はおそらく「正史」…つまり物語の本筋は通らないと推測できる…なぜなら転生させた渡入っていたからだ…「物語を破壊する存在がいる」と…。

「…そうだな、この歳になればある程度行動の余地は増えるし…とにかく、今は力を蓄えよう。」

力…それは貴族、メイジであるが故の特権…「魔法」だ。確かに大きな力…「Wドライバー&ロストドライバー&ガイアメモリ」は所有している（いつのまに化おもちゃ箱に混入していた）、だがあの力は一般のメイジに使うには大きすぎる力であるし、おそらく「異端」扱いされるか「戦争の兵器」として利用されるか…悲しいが、どちらにせよマイナスなことしか思いつかない。

「…ところで、例のモノの構想はまとまってるか？」

「今のところは順調！でも材料は大丈夫なの？」

「そこはエイに無理を言ってがんばってもらってる。でもどうやって父さんに納得させるか迷ってる。」

「なら市場で買うことにして、そこで偶然見つけた変わり物…でいいんじゃない？」

「…ふむ、そうか、エイの知り合いに商人の伝手がいたはず。ありがとうリリウム、そうするよ！」

「えへへーー。」

ブレイブがリリウムの頭を撫でる…転生前の彼らを知っているものにとっては「お前ら付き合えよ」とよく言われた光景であるがやはりどう風向きが向いても彼らに「恋愛感情」はない…、なぜかない。それに双子で恋人は…色々とアウトである。

＊＊＊

…夕食前のブレイ家にはここ最近とある慣習がある。
それは…

「おかあさま、ほんじつのゆうしょくをもってまいりました。」
「今日もありがとうね、リリウム。」

ブレイブとリリウムが交代制で寝室で寝たきりの母…メリーに夕食を持ってくることである。
先述のとおり彼らの母であるメリーは現在患っている身であり、おそらく命に危険がないにしろ病持ち…本来ならここはメイドの仕事であろうが、これは彼女メリー自身の所望でもあった。
「せめて子供の顔は毎日見たい」という母親の切なる願いである…その願いは子供たちにも通じ、夕食前以外も…特に基本家の中で過ごすリリウムは顔を見せに事あるごとにやってくるのだ。

「でもリリウムとブレイブももうすぐ5歳ですか。時がたつのは早いですねえ。」
「えへへ。大きくなったでしょ?」

優しくなでるメリーにリリウムは一気に精神年齢が減少するのだ。
これは彼女の境遇の関係がある…生前、及川優梨子は母親を病気で

失っており、小さいころの出来事であったため彼女は「母親のぬくもり」を知らずに生きてきた。
しかし自分はこれで2回目の人生…目の前には2人目の母であり実質初めて触れあった「実の母」でもある…そんな彼女の手のぬくもりが、リリウム…及川優梨子という魂を、まさに5歳児の如く戻してしまう…しかしそのぬくもりは優しい、自分の肌でそのぬくもりを感じて入ることに幸せを感じるのであった。

「5歳…となるとあなた方は杖契約…ついにメイジデビューなのですね。リリウムはどの属性になりたい？」

属性…土、水、風、火、そして幻の属性として虚無…虚無は例外として除き可能性がある4つの属性…主に魔法の属性は親の遺伝が多大に影響してくるので、大体は察することができるのだが。
ちなみにヤンは風のトライアングル、メリーは土のトライアングルである。

「わたしはみずのぞくせいがいいです！」
「おや？どちらでもないのですね？」
「はい！しょもつでしらべましたが、みずのすくうぇあになればたいていのびょうきのちりょうはかのうだそうなので、はやくみずのぞくせいをきわめておかあさまをらくにしてあげたいのです！だってておかあさま、ときどきすごくくるしそうなんだもの。」
「…リリウム。」

娘の愛はメリーの心に何倍にも増幅され、同時にその許容量を超えた感情が「涙」という形で具現化する、おそらく病の身というのはかなり心の負担となるであろう、自分は迷惑をかけっぱなしで、子供たちとも遊ぶことができない…たまっていた感情でもあるのだろう。

「…では水を極めて、私だけでなく民達のことも助けられる立派なメイジになりなさい。」
「はい、おかあさま！」

…ちなみに偶に部屋の前を通りかかったとある某親バカパパがこの話を聞きメリー以上に号泣した挙句夕食時にも涙を流し続けていた…とか、余談でしかない。

運命の剣

トリステイン王国の首都「トリスタニア」、首都という名の恥じぬぐらい人があふれかえり、活気が感じられる、まさに「人と金が交錯する場所」という感覚、と言えば…わからないであろうか。
ここからブレイ家領地までは約1日…この世界に来て、初めて車というもののありがたみを、転生者であるブレイブとリリウムが感じたきっかけでもある。
だが彼らのそばにはいつものように親バカパパであるヤンがいない…本日はブレイブがヤンを説得してリリウムと2人…そして専属メイドであるエイもつれてやってきたのだ。
今回のトリスタニア出向の目的は「自分の目でふさわしい杖を見定めるため」という名目だ、2週間後にはブレイブたちの5歳の誕生日…つまりは杖契約を行う日、つまりは晴れてメイジデビューとなる。
そのための杖は本来ならヤンがいつもマジックアイテムを頼んでいる伝手に頼もうと思っていたらしいが、ブレイブとリリウムの本当に珍しいわがまま「自分達に杖を選ばせてほしい」というわがままが浮上し、何年かぶりに聞いた子供たちのわがままに親バカであるヤンは即答で了承を出した。
だがそのあとが問題であった…ブレイブの要求2はこうだ、「自分とともにする相棒ともなる存在、その存在は自分達の眼だけで見定めたい、さらに歳を考えれば自分達は独り立ちという将来を考えなければならない、そのための予行演習として自分達とメイドだけでいかせてほしい」という要求、これには先述の通り親バカであるヤンは渋った、彼らはまだ魔法も使えない貴族、金に飢えている愚者達にとってはいい金づるおよび脅迫材料（実際にはコモンマジックは使える）、何よりかわいい子供達を危険な目に合わせたくない…親の切なる願いだ。

だがブレイブたちが本当に何年振りかにはっきりといったわがまま、しかもかなり必死な様子だ…ここは巣立ちを見送る親鳥の気持ちで見送ろう…と、トリスタニアと旅立った馬車をヤンはずっと泣きながら見送って行った…だがブレイブは気付いている、自分がいわば地球の番組で言う「はじめてのおつかい」状態…つまりカメラマン…および「偵察者」がいることを。

「…気付いているぞ、ヴァオー。」

「ハッハァー！！さすがブレイブ様だ！1分足らずで俺の気配に気づくとはわなぁ！！」

「伊達にお前達から訓練を受けていないからな。」

説明しよう、彼、否彼ら…ヴァオーをはじめとするブレイ家暗部組織、名を「ＯＲＣＡ旅団」。

…ブレイ家の領地の周りにも、もちろん他の貴族の領地が存在する…が、偶然が重なり周辺の領地は荒れ果ててしまい、平民たちは生活に困っていた。

…そんな中、平民の選択肢としては「夜逃げ」…つまり他の領地へと逃げ込もうとする平民がいるのだ。

本来ならそんな平民などたいていの貴族は厄介払いするのだが、ヤンのモットーとして「百を知るまで見聞せよ」というものがある…ブレイ家の領地は小さい分、領地の管理や警備が行き通っている…つまりは夜逃げした平民がどこからか入ってくることがすぐに把握できる、ヤンはそんな夜逃げした平民の元へ行き、平民が前に住んでいた領地の状態、扱い、そして夜逃げに至った経緯…それをしっかりと調べ上げ、「脱するに値した状態であった」と判断するとその平民を受け入れてくれるのである。

だが条件もある、新しい農地の開墾を手伝う代わりに、他のものより多めの納税など…だが生活の補助も手伝ってくれる貴族などなかなかいない、おかげでそういった他の貴族とは一線を画した行動を

とることでヤンは信頼を獲得しているのだ。
だがそういった甘い話を聞きつけて嘘を吐き領地に取り入ろうとする輩がいる…だがそういったもの達は気をつけてほしい、ブレイ家にはどんな組織よりも強く、何より隠密行動に長ける組織「ＯＲＣＡ旅団」がいることを…。
彼等は先述の「夜逃げしてきた平民」の中から戦闘経験があるものや、改心しながらも犯罪歴がありまともに働けない…そういった「わけあり」の人達を集めた傭兵集団、そういったものは大体現役の時の腕を持てあましているものが多く、かなりの手慣れも多い、さらには高待遇で雇ってくれるために旅団メンバーの信頼もヤンは厚い…もともとはそういった「戦っていた」もの達を統括する組織を作ろうとしたのだが…このＯＲＣＡ、ここ最近で一番多い仕事は…そう、親バカのヤンの名は伊達にあらず、子供達の「護衛」である。…だがこの組織は隠れてとある仕事をしている…それは彼ら、ブレイブとリリウムの戦闘訓練の相手、そして彼らが親に秘密で所望するアイテムの採集…彼らが幼少ながらも簡易の杖を作れたり、「例のモノ」を作れたのも彼らの暗躍である。
故にブレイブ達とＯＲＣＡの関係は深く、なによりブレイブとリリウムはあの歳でＯＲＣＡの信頼を集めている。
おそらく「雰囲気」に過敏である彼らだからこそ感じた「異質さ」に惹かれたのかもしれない…閑話休題。

「と、いうわけでＯＲＣＡの皆さまは本日のことに関しての秘匿をお願いいたします。」
「リリウム様からのお達しだぁ！！真改ぃ！」
「…心得た。」

ヴァオーのように商人に変装したのではなく、真改は気配を消しながら物陰から見守っている…この２人がいれば大丈夫であろう…襲ってくる貴族がいれば、この２人によって下水道のネズミのえさに

なるの絵が見えてしまう。
…実を言うとこのそばにいる専属メイドのエイはＯＲＣＡのトップ３だという…なるほど、どおりでその歳で子供たちの専属をしているわけだ。

気を取り直しブレイブ一行が向かったのは大通りであるブルドンネから外れ、裏通りのチクトンネ街に近い場所…ここにとある小さな工房…鍛冶屋がある。
だが看板もなく名前もない鍛冶屋だ…ここはまさに文字通り「隠れた名鍛冶職人」がいる場所らしく、そこにブレイブが所望していた物がある。
少し立てつけの悪いドアを開くと…そこには今まさに加熱した鉄を伸ばしている最中である鍛冶職人…職人、というオーラを纏うガタイのいい白髪の男がいた。

「う？…なんだ貴族か。うちには貴族が好むようなけばい剣は置いてないぜ。」
「…私だ。」
「！おお！真改じゃねぇか！」

この職人は剣の使い手である真改に教えてもらった…ブレイブがある日ＯＲＣＡメンバーに「腕のいい鍛冶職人はいないか」と聞いたところずばりと剣を使う真改がここを教えてくれたのだ…名もない鍛冶工場、確かにその手の専門家でなければここを知ることができなかったであろう。

「真改がいる…てことは、あんちゃんか？あの剣の依頼主ってのは。」
「その通りです。…初めまして、ブレイ家の長男、今現在ブレイ家の次期領主を名乗らせてもらっています、ブレイブ・ノクト・トー・

ド・ブレイです。」
同じくブレイ家長女のリリウム・フリー・ド・ブレイです。以後お見知りおきを。」
「ほぉー！こりゃ驚いた。」
「驚いた、と申しますと？」
「いやいや、俺は癖で貴族相手でもこんな口癖になっちまうからよく喧嘩に発展するんだけどよ、あんたらは貴族の餓鬼にしてはよくできた、いや大人以上によくできた人間だ！」
「…俺の尊敬する主だ。」
「はっはっは。いいぜ、真改の気に入った理由がわかったような気がするぜ。それにブレイ家はここらでも評判がいいからよ！…ほれ！依頼の品だ！」

愉快に大笑いしながら工場の奥に向かい、そこからせっせと急ぎながら主人が運んできたのは…なんの装飾もされていない一本の鞘…否、その鞘に小さくトリステインの文字でこう書かれていた。
「永遠の切り札、ここにあり」と…。

「御依頼通りしっかりと例の代物と魔力結合するように作っといたぜ！…そうだ、さっそくここで振ってみな！振ってみてな、俺はその剣とその持ち主が相性ピッタリかすぐにわかっちまうんだ！」
「…わかった。」

そういいブレイブはその鞘からゆっくりと剣…バスタードソードを抜く…剣の長さはブレイブの身長に合わせ８０センチの長さである。その剣は…いっさいの装飾はなし、まさに「剣」という存在事態の危険な美しさを体現したような剣…そして柄の部分には…まるで血を駈け廻るように魔力を剣に行き渡らせている霊石…アマダムが存在する。
その霊石をしっかりとみつめ、自分の背を預けるような感覚を発動

させ、霊石の「神秘なる力」との共存を図る…そしてその石と「呼吸」を同調させたときに…ブレイブは一心に…振り切った。
その斬は工場のよどんだ空気を斬り…まるでその斬った空から生命力漲るような新鮮な空気が混じったような感覚に陥る。
そしてその様子を見た主人は笑顔でうなずいた。

「よし！お前と剣はピッタリな息だな！しかしここまでピッタリ、てのも逆に怖いな！がっはっは！」
「…守りたい、と思ったからな。この霊石はその者の感情によって力を与えてくれる。悪しき者には狂気の力を…そして正義を思う守護者には守る力を。この霊石と俺の願いは同調した、それだけだ。」
「うむ！その心意気やよし！俺も珍しい剣を作ってそれにぴったりな主を見定めた！気分がいいってもんよ！」
「…うむ、あなたは信用に値する名工であった。…エイ、報酬金を。」
「はい。」

エイの懐から出された子袋…とは言えない大きさの袋、そのサイズに驚き主人が中身を確認すると…一本の剣の買い取り金額とは思えないような枚数の金貨の枚数であった。

「占めて５０００エキューだ。」
「ご、５０００！？とんでもねぇ金額だ！？」
「…この世とは”血筋”と”性別”の固定概念により人が支配されている世界…だがこの仕組みは余りにも古いし、なにより非効率的だ。…実力あるものがのし上がる社会、それが正しい身分の在り方だと自分は思っている…そしてそれがブレイ家の総意だ。…自分は質で金額を判断しました、それだけです。そしてあなたは僕の信用に値する鍛冶職人だ。いくら土のスクウェアメイジとはいえ、あなたのような本物の剣は作れない。希少価値がある。」

「…はっはっはっはっはははは!!!その考えじゃいつか異端扱いされそうだな!」

「…革命、というものは…すべてがその時代における異端ですよ。」

「肝が据わってて物わかりのある貴族なら大歓迎だ!それじゃああありがたく受けとっておくぜ!」

「こちらこそ感謝します。…それと、あなたにはいつかブレイ家専属の鍛冶職人になってもらいたいと思っております。」

「俺がかい!?おいおい、貴族が好くような剣は作れねェぜ!?」

「剣は身分と力の象徴ではありません。いかに美しく斬れ、いかにしなやかで、どれだけ断ち切るものか…それが剣の本質なのでは?」

「はっはは!いやー!あんた本当にもうすぐ5歳の貴族かい!?」

「ええ、これほどまでになく。…お名前は?」

「アレストスだ!いいぜ!その話乗ってやった!ブレイ家の専属になればまた物珍しいものを作れそうだからな!」

こうして去って行ったブレイブの背中は…アレストスいわく、「俺が見た中でも誰より貴族であった」と言っている。

＊＊＊

…トリスタニアの表通りにある大衆食堂は、あまり貴族は入らない、貴族達には変に確執したプライドがあり、「平民と食事を共にするのは御免だ」と言っているぐらいである。

だが飯のまずい店ならともかく、この店はうまいことが確信を持って言える…おかげでブレイ家がトリスタニアに出向した際はかならず寄っているほどだ。

「いらっしゃいませ!…あら!ブレイ家のブレイブ様にリリウム様じゃないの!」

「お久しぶりです。」

「相変わらず盛況のようですね。」
「おかげさまでね！おや？様子を見るとヤン様は来てないようだけど？」
「今日は僕とリリウム、そしてエイの3人だけでやってきたんですよ。」
「おやま！まだ5歳近くなのに偉いわねぇ！さぁさぁ、空いてる席に座ってくんな！」

…貴族と平民、この隔たりは絶対的であり、なにより明確である…
このトリステインの仕組みを知っているものは違和感を覚えたであろう、いくらまだ5歳近くだとはいえども彼等は貴族の血縁者である、なのにこの食堂のおばさんはあまりにもフランクすぎやしないだろうか、という疑問が浮かんだであろう。
実はこれはブライ家領主のヤンが直々にそうしろ、フランクに対応してくれ、と頼んでいるのだ。
これはブレイ家が代々続いている伝統みたいなもので、「平民は家畜ではない」という先代からの教えにのっとってヤンはこうしているらしい、それにヤンもそうしくれたほうが楽であった。
もちろん最初はそれに違和感を覚えた周りであったが、時間が経過しそれはすっかり定着、今ではこの食堂の常連はフランクに接している。
…まあある程度の分別は付けるし、他の貴族の前ではそうすることはできない…ブレイ家の考えは独特かつ周りの凝り固まった思想の貴族達には「異端」でしかなく反感を買う機会が多い…それでもヤン一同はこの考えを取りやめる気はないが…そういった毅然名面でも平民からの信頼は厚い原因の1つでもある。
もともとはほかの世界の常識を持つ転生者であるリリウムとブレイブもこの対処には感謝した。
なにせ元の世界では貴族なんてものはごく少数、しかもここまで確執的な隔たりはなかった、つまりはただ「慣れてない」のだ。

だからこそこうして仲の良い友達の娘息子のように扱ってくれるこの店の常連は大好きであったし、話しやすい相手でもある。
おばさんに紹介されたように席を座るブレイブ、リリウム、エイの3人、だがここでブレイブがエイに小言で「席をはずしてくれ」と指令した。
それに黙って従うエイ…彼女はいつもみている、ブレイブとリリウムの2人だけが話すような話し合いの時、2人は5歳にもなってないとは思えないような真剣な顔を見せることを。
だからこそエイは何も言わないし、ブレイブはただその配慮に心から感謝するだけである。
エイが席をはずした後に、リリウムは秘密裏に「サイレント」の魔法をかける…完全準備、これからの2人は「転生者」として話し合う。

「…これでブレイブの杖…というより剣はできたわね。」
「ああ、霊石…アマダムと剣の融合による杖と剣の完全ハイブリット化の試作品、まぁまだ魔法を試してないけど。」

アマダム…それは仮面ライダークウガで出てくる霊石であり、クウガの力の根源でもある。
時には悪しき力を与え、時には笑顔を守る力をくれる…決まった属性もなければ、きまった力の上限もない、まさに無限の可能性を秘めし石。
実を言うとこのアマダムの制作は簡単であった…リリウムに付加されていた「マジックアイテムを作るスキル」とこの世界に存在する「精霊石」の概念を用いて。
精霊石…文字通り精霊の力が込められた石である…火の精霊石は火を司り、水の精霊石は水を司る…なら精霊石の一種ともいえるアマダムはどんな力を司っているか…それは「人の感情による霊力」つまり「人の感情」によって形成されていたのである。

リリウムのアマダムの解釈はこうだ、「人の感情」という下地からなり、そこに「火」や「水」の力が介入したことにより「超変身」をする…そして「アルティメット」がなぜ制御できたか…それはアマダムの「感情」を司る力によって優し心に反応したアマダムがアルティメットを「優しき戦士」へと昇華させた…というわけである。感情を司る…というのには根拠がある、それはクウガの不完全な形態である「グローイングフォーム」あれは雄介の戦い決意が足りなかったためになった形態…こういった面で、心が反映される…となるとこういった解釈ができる。

さらにリリウムは言葉を続ける、クウガの変身フォームを確認すると「火」を司る「マイティフォーム」、「水」を司る「ドラゴンフォーム」、「風」をつかさどる「ペガサスフォーム」、「大地」を司る「タイタンフォーム」…この４つのフォームは司りしは４つの属性…つまりは、この力を行使できるアマダムは、この世界のような魔法が起源と関係しているのではないか、という推測。

確かにこの属性は所謂「魔法の属性」と一致し、そう考えるとアルティメットは…「虚無」と呼ぶにふさわしい。

アルティメットフォーム…すさまじい闇を作り出す存在で、クウガが「なって行けない姿」。

確かにあの圧倒的力は「虚無」ともいえる存在であるし、ほかの民族から虚無の使い手は「悪魔」とも呼ばれることがある…こういうところでクウガとの共通点らしき要素、仮面ライダーファンとしてむねがわくわくする。

そしてアマダムがこの世界の魔法と同じような力を起源としているなら…リリウムの「マジックアイテム作成のスキル」で応用を利かして作れることに納得がある程度行く。

「いやしかし…よくそこまでよくがんばってくれたな、リリウム。」

「えへへーー。」

リリウム…生前及川優梨子は自分が好きな存在から頭を撫でなでしてくれることを何よりも生きがいとしている。
その行動のより自分の周りに人がいて、そして「愛」がある…そう感じれることが大好きなのだ。
しかし彼女のやったことは大きい、確かにトリステインには杖に付属的に剣としての性能があるようなものはあるが…完全に剣と杖として機能し、なおかつ見たことがないであろうアマダムを利用した無限の可能性を秘めた剣…工場の主人アレストスが「珍しい」というのも納得であろう。

…と、リリウムが本能で感じた…自分の昼食の香り。
見れば、自分達の席に運ぶであろう食事を持ったおばさんがこちらに向かってきていた。
食事の時間か…とリリウムはサイレントの呪文を解除、食堂の騒がしい音や声が一斉に聞こえ出す。

「あんたらまた凛々しい顔で話し合ってたよね？一体何を話してたんだい？」
「ええ、2週間後には自分達は5歳…貴族として第一歩を歩くことになります。考えていたのですよ…貴族としての在り方、をね？」
「いやいやほんとにブレイ家の人達の優しさには涙が出るよ。」
「そうか！ブレイブぼっちゃんにリリウム穣さんも5歳か！時がたつのは早いな！よし！今日は坊っちゃん達の5歳記念で酒一杯持ってこい！」

ブレイブの後ろにいた…自分達が赤ん坊のことから知っているというお爺さんが囃したてると、食堂が一瞬にして祭りムードに変貌してしまった。
…まぁ、今日は遅いためこちらで宿泊しようとか考えていたし、夕食にはちょうどいいであろうか…まだ昼食の時間であるが。

こうしてブレイ家と親交を持っている食堂のお得意さん他の平民達で絵に描いたように飲めや歌えやの騒ぎとなり、結局護衛任務についていたはずのヴァオーも悪乗りして参加、その日の食堂の売り上げは通常の3倍にもなったという。

…貴族の在り方。

こブレイブとリリウムの「貴族の振る舞い」は完全に自分でイメージを固め、作り上げた「ブレイ家」という人格である。

彼等は貴族の振る舞いなど知る由はなった…だがブレイ家のあり方を知り単純に彼等は感動した。

貴族と平民の隔たりが強い風潮の中、それにあえて逆らおうとする勇気と人格…原作で貴族達の醜態を見ている彼らだからこそもっと感動した。

だからこそ「ブレイ家」としての在り方を貫き通そう、そう彼等は行動してきた…だが彼らにも「疲れ」というものは存在する。

その日の夜は、専属メイドであるエイの腕枕のもとで2人は夢の世界に入って行ったという。

運命の剣（後書き）

独自設定全開の回。
アマダムの解釈ってかなり妄想多めだけどこんな感じだよね？おそらく…。

覚醒　《目覚める雷鳴》

「まぁ、ブレイブとリリウムの紹介する必要もなかろうが…。」
「本日からお二人の魔法指導担当となったメルツェルです。以後よろしくお願いいたします。」
「ええ、よろしくおねがいしますめるつぇるさん。」
「わたしからもよろしくおねがいします。」

…本日はブレイブとリリウムの由緒正しき5歳の誕生日であり…彼らの晴々しいメイジデビューの日だ。
夕方からは家の者全員で誕生日を祝うこととなっている…この規模と言ったら伊達じゃない、なにせメイド全員にまでいつも貴族が食しているような豪華な夕食を振る舞い、領地の全員の民に恩赦として祝い品を提供するのだから…こういった無駄な支出でブレイ家はなかなか領地拡大に至ることができないのだが、ヤンとメリーは今のままの大きさでも、ただただ皆が幸せに、何より子供無事にすくすく成長しているのだからこれぐらいはしなければ、と言っている…まぁ、そんな親バカな両親がブレイブとリリウムは大好きなのであるが。
しかし誕生日会は夕食時、現在の時刻は午前、まだランチの時間には早い時間帯である。
それまでには格段やることはない…ということで、1日早め今日から魔法の練習を行うことなったのだ。
ちなみに彼はＯＲＣＡ旅団の頭脳、トップ2のメルツェルだ…彼はロマリアの異端査問によって領地を奪われ落ちぶれてしまったいわば貴族崩れだ、そのため彼と…彼の兄であるＯＲＣＡリーダーのマクシミリアンは魔法が使え、さらにはメルツェルが水のスクウェア、マクシミリアンに至っては土と風のスクウェア…と、落ちぶれた貴族には過ぎた力を持っている…そのためロマリアに命を狙われ続け

ていたのだが、彼等はブレイ一家いわく「王になればその国は非常にバランスのとれた理想的な独裁国家となるだろう」と言わせている…彼等は策士、それも策士として一番敵に回したくない部類の性格だ。
だからこそＯＲＣＡが最強の暗部組織として君臨しているわけだし、こうしてロマリアの追ってからのうのうと逃げ切れたのだ。

「うぬ…ブレイブ様は…すごいですね、特殊な魔法石を利用した剣と杖のハイブリッド型…いやはや、これを制作した人には拍手を送りたい。」

…と、ヤンにばれないようにメルツェルはリリウムにウインク…ＯＲＣＡの策士としてこの剣の作成者も知っている、だが彼らの純粋な気持ち…「大きな力は時に不安を生む、そんな不安を親には抱え込んでほしくない」というリリウムとブレイブの配慮からＯＲＣＡ最高機密の１つとなっている。
そんなことを聞いたマクシミリアンとメルツェルは「本当に５歳にもなっていないのか？」と本気で疑ったのと同時に…ますますこの兄妹には興味を持った、今のメルツェルの興味の行き先はこの兄妹の未来とこの兄妹が…この世界にどんな影響を…革命を起こすか。

「リリウム様は…これも魔法石を利用してますね。…なるほど、これも杖と銃の一体型ですか。…これも興味がそそるすばらしい作品だ。」

もちろんこれもリリウム謹製である…このリリウムのマジックアイテムにかける才は目に余る、この歳で精霊の力を封じ込める技術、さらには見たこともない未確認な魔法石の作成…この歳で「革命」を起こしている…正直この才は多才と呼ばれるメルツェルでも嫉妬するぐらいだ。

「では2人は手始めにコモンマジックを覚えてもらいます。…とは言いましても、努力家である2人にとっては知識としては完璧でしょうから、私の実演を見てもらうだけでいいでしょう。」

コモンマジック…属性を関係なしに、大体のメイジが普遍的に扱える魔法…初歩に覚える魔法、ともいえばいいであろうか。
コモンマジックは例外を含め8種類…ライト、ロック、アンロック、ディテクトマジック、念力、リードランゲージ、例外はサモン・サーヴァントとコントラクト・サーヴァントの使い魔召喚の際に使う魔法もコモンマジックである。
そしてそれをスタートに分岐するのが属性魔法…火、水、風、土、そして例外として虚無…ここでは虚無を省き説明することとしよう。
実は、その者の魔法資質にもよるが、各々の属性の初歩の初歩の魔法は努力次第ですべて使えるようにはなれる、それも1カ月ほど練習すれば「ファイアーボール」、「ウインド及びサイレント、またはフライ及びレビテーション」、「コンデイセイション」、「錬成及び固定化」は努力次第ですべて会得することができる…実際に、リリウムはサイレントを普遍的に使用していた、おそらくヤンが風のメイジであったためにその属性の適性を受け継いでいるせいもあるであろうがサイレントと固定化、錬金はおそらく魔法学院に通う頃には2分の一の生徒はマスターしているであろう。

「ではこれから…ライト。」

すると快晴の昼であるからして把握はしにくいがメルツェルの杖の先が光っているのがなんとか認識できた。
これはライト、文字の如く明りを照らす魔法で、洞窟探検や薄暗い森に潜り込むときに使われる普遍的魔法である。

「ではまずブレイブ様から…といっても剣ですから、杖をお貸ししましょうか？」
「いや、心配無用。」
するとブレイブの腰に引っさげていた剣は一気に短剣…グラディウスサイズまで鞘ごと縮み、一般的な長杖と同じようなサイズとなった。
これはアマダムの力が関係してある…クウガタイタン、大地を司る勇ましき剣士…そのフォームが持つ固有武器「タイタンソード」は刃の伸び縮みが可能であることを利用し、試しにやってみたらできた…ということで基本はこの形態になるであろう。
「これはまた興味深い剣ですな。…ではブレイブ様、イメージしてください。杖の先に光が収束し、周りを照らしだすことを、そして自分の中にある精神力を前身に循環させる感じで。」
杖の先を光らせ周りを照らす…と聞いて、イメージしたのは懐中電灯だ。
確かに杖の先から光を放ち、杖の持ち方なんかは懐中電灯の持ち方に似ている面もあるからだ、この特有のイメージができるのも転生者の特権である。
「ライト。」
ブレイブの詠唱が終わると、剣先からまばゆい光源が発生した…成功である、微妙に前方向に光の方向が集中しているのはおそらくイメージしたのが懐中電灯であったからであろう。
「ブレイブ様は一回で成功ですか…本番はこれからです。次は…」

そう呟きながらメルツェルが懐から取り出したのは簡易性のカギがついている小箱であった。
これを見たとき大体何の魔法をするかは見当がつく。

「ロック。」

メルツェルの詠唱に呼応し小箱のカギは「かちり」と音を立てながら施錠され…

「アンロック。」

矢継ぎ早に詠唱された魔逆の魔法によって施錠は一瞬で解錠された。
ロック…ドアなどのカギを施錠する魔法、アンロックは施錠されたドアなどを解錠する魔法である。

「この魔法はまだイメージがしやすいと思います。頭の中に対象のカギの姿をイメージし、それを施錠する時と解錠する自分の手をイメージしてください。」

これもイメージはしやすかった、ブレイブの転生前の世界には魔法なんて存在しない、故に施錠、解錠は自分の手で行っていた。
ただそれを思い出せば、後は簡単である。

「ロック。」

その詠唱に小箱はまた施錠され…

「アンロック。」

施錠されたばかりのカギは再び矢継ぎ早に解錠された。

「これも難なくクリア。…ではディテクトマジックとリードランゲージは並行で行いましょう。」

これには理由がある、それはどちらも「情報を得る」という同系の魔法、どちらかが成功すればもう片方も成功しやすいからである。これに関してもブレイブは難なくクリア、東の国からもたらされたという書物の情報の会得及び内容の意味の把握もクリアした。

「では最後は念力です。魔法においての原点ですね。…これは私の持論なのですが、属性魔法の４割は、念力の応用である、と私は思うのですよ。」

たとえば水属性魔法のコンデイセイション、これは大気中の水分、いわば水蒸気を液体状態に変化させる魔法…だがどうやって水蒸気を集めているのか？これが疑問として湧きあがる。

ここで「水精霊の力」と普遍的なこと言うのもいいであろう、だがそこで思考停止してしまうのは「ユーザー」の考え方、メルツェルは魔法科学者として独自の切り口…魔法の原理というものを研究していた。

火の属性魔法であるファイアーボール、風の属性魔法であるウインドも同じ、なぜ大気を押し出すことできるのか？なぜ発生させた炎を操ることができるのか？もしこの魔法らに「念力」の効果が作用しているのだとすれば…そういった今まで考えないような切り口でメルツェルとマクシミリアンは研究していた…それに加えなまじメイジとしての力があり、さらにはほかの異端紛いのことに手を染めていた結果、ロマリアから命を狙われるようになったわけだが…これは余談である。

だがこの切り口からの理論は非常に納得できた、実際にあてはまるし、確かにどの書物でもそういった「原理」を詳しくは書いていな

い、つまりは誰も「追及」したことがないジャンル、非常に惹かれた。

「と、小難しい理論はここまでにして…要約すれば、今から覚える念力というものを誰よりも極めれば？そうすれば、おそらくメイジとしての可能性を広げることができる、と自分は考えております。あくまで頭の隅に入れておいて、参考として下されば幸いです。」

「いえ、メルツェルさんの理論は非常に興味深いです…ただ、それはロマリアに命を狙われますよね。」

なにせ今までの魔法の原理は「精霊の加護」やら大気中に漂っている「微粒子」からだ、などあいまいかつどこか意思を感じさせるような知識の吹き込み…特に精霊の加護、という要素は宗教上大事にしてあるはずが「それは間違っている」と言われて始祖の信仰教徒が減ってしまったら？考えすぎではあるが、時代はいつも新しい考えを受け入れないものである…ガリレオの「地動説」などがいい例であろう。

「まぁ異端ではある、と昔から自覚はあったが。…それでは、まずは実演から…念力。」

すると庭に堕ちていた普遍的な小石が浮き上がり…メルツェルはまるで走り回るウサギにめがけて放つように石を飛ばした。

「念力は使い方と極め方次第ではそれだけで戦える魔法です。先ほども言った通り応用も効きます。…では、そちらにある小石を浮かべてみてください。」

メルツェルの示す先にあったのは先ほどより一回り小さめの小石…浮かせる、というのはいまいちイメージが難しい、そんなことがで

きるのはまさに魔法使いや超能力者の世界であったからだ。
…まて、メルツェルの話を思い出してみよう、そう、「魔法の原理はいずこにあるのか」という話題であった…魔法の原理、そう、それはいわゆる「科学」である、化学現象によって何かが起きることによって火を操り、水を操り…すべては科学で解明される、とどこかのドラマで聞いたようなセリフだ。
だがこの考え方は非常にブレイブの助けになった、そもそもなぜ石やものは落ちるか、浮かぶことができないか?それは星のひっぱる力「重力」があるからだ。
ならば重力を操作するイメージでならどうだろう?石の真上に重力を想像することによって石を浮かせているのではなく石を力の流れにのっとらせる、あるいは重力に逆らう力のイメージが有効か。
…この試みは成功したようで、石はゆっくりと、しかし確実に浮き、ブレイブの身長の半分の高度まで上げることに成功した。

「では先ほど私が放ったあの石にぶつけてみましょう。少々ハードかもしれませんがブレイブ様ならできるでしょう。」

先ほど放った石…となるとあそこの茂みのそばに落ちているあの石である、を認識する。
これはターゲットに向かって狙撃するイメージ、とはいっても生前、転生前に銃など握ったこともない、せいぜい射的でキャラメルを落としたぐらいだ、相手は動かないターゲット、だがこれから出会う敵はたいては動きまわるであろう…射的のイメージでならこの場は成功するであろう、だが今学んでいるのは「未来」のため、妥協は許さない。
…と、ブレイブは生前の、それも今と同じ5歳ころの記憶をフィードバックしていた。
思えばあのころはまだ自分の住むところは田舎で遊び装具が少なく、自然と旧時代なおもちゃで遊んだものだ。

缶けり、縄跳び、どこかの友達がホッピングも持っていた…そうだ、パチンコだ。
思えば自分は少しだけ悪ガキであった、あのころはまだ「仮面ライダー」という存在に憧れていなかった時代、どうもこの時代の子供は生き物をいじめたがる歳で、よくパチンコで飛んでいるスズメに向かってパチンコで狙撃していた…そうだ、この時の記憶、パチンコで狙撃するようなイメージを持てば…。
その目論見は再び功を奏し、加速がついた小石は見事に先ほどの小石にクリーンヒットした。

「お見事ですブレイブ様。まさかこんなにうまくいくとは。」
「すごいです、さすがブレイブお兄様です。」

少しだけ浴びせられた称賛の声、だがまだランチの時間は遠い…つまりは魔法の訓練はまだまだ続く、そういうことだ。

「それではやっと本番、ブレイブ様の属性見極め試験を行いたいと思います。…そうですね、ここは初級の中での上位魔法に挑戦してもらいましょう。そうすればはっきりと属性がわかるはずなので。…ではヤン様が風のメイジ、ということで…ここは最初からストームから挑戦してもらいましょうか。」

ストームとは名の通り竜巻のごとく突風を生みだす魔法である。
この風のコントロールのレベルと風量からメルツェルは判断するらしい。

「では始めましょう。スペルは”イル・ウィンデ”です。」
「…イル・ウィンデ。」

と詠唱したまでは良かった…だが詠唱した瞬間、ブレイブは今まで感じたことのないような体に溢れる力を感じた。
先ほどまで行っていたコモンマジックとは格が違う量の精神力…それが一気に加速され体をめぐる感じが、そしてその精神力と比例し…目の前には、周りの植物を刈り取ってしまうほど強力な突風…否、暴風が巻いていた。
さすがにこれはやばい、とブレイブは精神力の循環をカット、その行動のおけげで竜巻はゆっくりとながらも消滅した。

「ブレイブ様！体は大丈夫でしょうか！？」
「…いや、今のところは何も。」
「…ディテクトマジック。」

何を思ったかメルツェルはディテクトマジックで自分の体について調べている。
そして彼は眉を寄せ…自分の中でとある仮説を打ち立てた。

「あのこの歳であの風…なのに疲労はほとんどなし。…すいません、あの石に大して攻撃するイメージを持ちながら、これから行う詠唱を繰り返してほしいのですが。」
「わかりました。」

これはなんな面倒なことになってきた、と内心ひやひやしながら指令されたとおりにブレイブは詠唱を行った。

「我、風を愛し者、風に愛されし者。」
「我、風を愛し者、風に愛されし者。」
「戦いの意思を、現世に轟かせよ。」
「戦いの意思を、現世に轟かせよ。」
「一閃する雷光、ライトニング。」

「一閃する雷光…ライトニング！」

その詠唱が終了しそこにある石を攻撃するイメージを行うと…目の前の石に、とてつもない轟音をとどろかせながら落雷が一閃した。そしてその石は当然の高温の電気の塊に当てられ文字通り焼け石状態となった。

「…わかりました、ブレイブ様は生まれつき風のメイジとしての資質に恵まれていた…いや、このレベルまで来ればもはや風の精霊に愛された、ともいえるでしょう。」

「…風の属性を極めたものが行きつく一つの極み…ブレイブの属性は…雷。」

雷…そもそも雷を行使する魔法は風属性魔法の上位として存在し、雷を使えるものは風メイジとして1人前を超えた、ともいわれる。だがこのブレイブは5歳というコモンマジックすら習いたての子供、だがその子供がいきなりトライアングルクラスの暴風を発生させ、上位魔法であるライトニングを無意識でコントロールしたのだ。本来このライトニングの魔法は制御が難しく、熟練していないものが使用すると最悪自分の身に落雷させることもある危険な魔法、だがブレイブは5歳ながらも圧倒的に小さいターゲットである小石に、確実に、それも周りに被害を発生させずクリーンヒットで落雷を成功させた…もはや、風のスキルに関しては最低でもトライアングルの下位、ライトニングの制御と今でもまだ精神力が有り余っていることを考慮すれば…

「おそらくブレイブ様は冗談なしで風のスクウェアの一歩手前、否、もしかすれば…。」

5歳にして、強力な風を操りながら雷の加護設けた…過去何百年の

資料でも存在が1人しか確認されていない「忘れられた属性」…「雷」。
今はまだ経験不足、ということもあり風の魔法に関しては制御だけが不完全、だが1か月は鍛錬を繰り返し制御のコツをつかめば…ヤンの風を超えるメイジとなる。

「…これはまた一層と自慢な息子を持ったな。」

だが彼の顔は「自分おも超える息子を持った」という誇らしげな満足な顔と、ブレイブのこれから歩む未来に少々の不安を感じる一面であった。

検索を始めよう（前書き）

あけましておめでとうございます。

検索を始めよう

ブレイブの属性は「雷」…風の上位に君臨し、かつてその属性を持っていたメイジは過去1人だけという「虚無」とは違った意味で忘れられた属性である…風のスクウェアの行きつく極みの1つとして「偏在」の魔法の習得がある…だがこの「雷」はその上に行くものでもあり、少しずれた意味での極みともいえよう。
強大なる風を操り、一瞬にして現世に雷雲を呼び起こす祈祷師ともいえる、一説によれば「風」の突然変異といわれるが、なにせ雷の属性を持ったのはたった1人、しかもかなり昔のことあって詳細はまったく解明されていない。
しかもブレイブが本当に「雷」であるかメルツェルにも１００％とは言い切れない、だがこの風属性の資質の異常な高さ、そして雷を無意識に操りし力量、１００％ではないにしろ９２％はそういえる…とメルツェルは言っていた。
その後メルツェルは「少し調べるものができました」とだけ述べどこかへと姿を消した、もちろんヤンも了承している、何せヤンも同じように書斎へと赴き、おもむろに書物をあさり始めたのだから…結局として、２人の魔法訓練は急遽中止となり、リリウムの属性はわからずじまい、となってしまった。
だがそれは納得できないリリウム、「せめてコモン・マジックは練習する」とヤンに言い、その後夕食の時間まで魔法の練習を行っていた、属性魔法の練習もしたいが、そこは専門家ではないリリウムが独断するのはどうか、とリリウム自身が考えやめたらしい…ちなみに、その時使っていた杖は一般的な杖である。
リリウムが作り上げた「銃と杖のハイブリッド」、とはいってもこれは試作型、そもそもこのハルケギニアの銃と言えば地球で言う「マスケット銃」、連射も出来なければ、弾を装填するのにも時間がかかり、なおかつ携帯するのには大きすぎる…しかもリリウムはま

だ5歳、銃の反動に耐えきれるはずもない、つまり現状にとっては「ただの大きい杖」であるだけ。

だが、ブレイブの剣とリリウムの銃、どちらも「杖」として機能する…となるとこれは「発明」だ。

特に銃に関しては今まで誰もやったことがない、おそらく杖と銃、お互いに持つ者の分別を行っているからであろうが、メルツェルは考えた…「もし現在使われている銃を小型化したら、これは大発明へと進化する」と。

実はこのことに関してはリリウム及び銃の制作を担当したメイドのエイは結果として考えていた…リリウムが目指すのは、「魔法による弾丸を放つ小型銃」…モチーフは「仮面ライダー剣」に出てくる「仮面ライダーギャレン」が持ちし「醒銃ギャレンラウザー」だ…これに関しては完全に趣味である。

だが機構が難しい…何を弾丸とするか、その機構の小型化をどうするか…何を弾丸にするか、については問題は解決できそうである、だがその機構の「小型化」に関しては難しそうだ…せめて前世での「銃」に関しての知識があればいいのだが、今からそれを取得するのは無理だ。

…ちなみに言うならば、ブレイブの持つ剣のモチーフも「仮面ライダー剣」の「仮面ライダーブレイド」が持つ「醒剣ブレイラウザー」だ、まさかそれに呼応するがごとくブレイブの属性が「雷」になどなるとは思わなかったわけだが…。

この剣や銃、構想はいい、そして実用kに至るまでは意外と簡単であった、イメージとしては「魔力を持ち、魔力を循環させる剣や銃」を作るだけであったから、そこはリリウムが「アマダム」を制作してくれたことによって実現に至った。

だがおそらくこれを使うブレイブやリリウムは一般的には「変わり者」だ。

原作で武器屋の商人が言っていたように「貴族は杖を振り、平民は武器を振り、そして女王様はバルコニーから手を振る」…最後の言

葉にどうも毒を感じざる負えないが、こればっかりは擁護できない。だが貴族が剣や銃を持つ、というのは色々と変な扱いをされるものだ、そういう武系な貴族もいるに入るが。

だが考えても見てほしい、ただでさえ魔法をつける上に武器も使えたら、単純に心強い、だがここに関してもすぐに考えを変えないのがこの世界の大多数の貴族であろう…たがメルツェルは純粋に興味を抱き、ヤンに関しても自分達の杖及び武器を晒したとき、関心を持ってもらえた。

…まぁ、他の貴族に見せた場合は疑問を持たれることは間違いない。

――――――場所はブレイ家の書物保管庫、ここにはブレイ家が代々収集してきた書物が文字通り保管されている、魔法の書物から領地管理、はたまた東方の文化や各国の歴史関係の書物まで、魔法学院の図書室には及ばないが話によれば先々代が読書好きであったらしく、並みの貴族よりも多い書物量だという。

…そしてこの場に本を読みあさるものが1人、ヤンでもなくメルツェルでもない…あの後リリウムとは別行動をとったブレイブだ。

書物保管庫にいるならば、もちろん目的はそこにある膨大な書物類にある…ブレイブが探していたのは少し前に目を通したとある書物…というよりちょっとした伝記本だ。

「…あった。」

見つけたのは「雷鳴の使途」という題名の本…何百年も前に実在したというとあるメイジがトリステインで戦っていく、という伝記…なのだが、その主人公である通称「雷鳴」は実在したのかがここ最近疑われており、ちょっとした議論となっているらしいが…とにかく現在は「実在した人物の戦記」として落ち着いているらしい。

「果てから現れた救世主、そのメイジが操るは火でもなければ水でも土でもない…操るは轟く稲妻、天から落ちる裁断の雷は天と地と

人に語り継がれることとなった」…有名な前述の部分である。
そしてこの主人公、正式名称不明の二つ名「雷鳴」のこの主人公こそが唯であった「雷」の属性を持ちしメイジである。
…だが、この戦記は主人公に関して詳しく明記はされていない、明記されているのはその人物が行ってきた諸行善行をただただ語り継いでいく、という内容だ。
特に有名な物語はこの「雷鳴」が当時のトリステイン王家一行を謎の存在から助けた物語、女王と王女に迫る魔の手から一閃とともに颯爽とやってきた雷鳴…まさに英雄ともいえる。

「…やっぱり雷鳴に関しては明記されていない、か。」

ブレイブが求めたのは「雷鳴」に関しての詳細、及び「雷」という属性についての詳細だ。
まずこの「雷」という属性は原作でも聞いたことがない、知識としては「風属性魔法の上位に雷を操る魔法が存在する」ことは理解している、だが属性として確立した「雷」が存在することは初耳である…この属性を持ったことで一体どのような魔法が使えるか知りたかったのだが…こればっかりは自分で模索するしかなさそうである。
…大量の書物によりテーブルに壁を作っているブレイブのそばに、とある人影、特徴的な白のメイド服に身を包んだ銀髪の女性…専属メイドのエイだ。

「ブレイブ様、夕食のお時間です。」
「ん…しまった、もうこんな時間だったのか。…リリウムは？」
「先ほど魔法の練習から引き揚げて現在はヤン様と一緒におられます、どうやら少々ご無理をしてしまったらしく疲労が残っているそうです。」

無理もない、リリウムが練習を始めたのが昼食を食べ終えた直後、

おそらく4時間も練習してきたはず…初めてであるはずなのに無理がある…これはリリウム、生前及川優梨子の癖で、物事に集中するとどうしてもそのほかを厳かにする、特に自分のことに関しては、だ。

…いい例として、生前、つまり転生前の話であるが…優梨子が集中モードに入ってしまい2日間近くにあった2リットルのお茶とカロリーメイト1箱だけで過ごしながら司法試験の勉強をし続けた結果倒れ、その後1日付きっきりで立花が看病した、という笑い話もある。

「”雷鳴の使途”…なるほど、ブレイブ様も同じことを考えておりましたか。」

「…となると、メルツェルとお父様もか。」

「しかしブレイブ様の属性が雷だとは…才がお有りで。」

「制御できなければ宝の持ち腐れ。おそらく完全な制御の完成が僕の一番重要な課題かな?」

ブレイブの属性は雷…といっているが、正確にはブレイブの属性は「雷だけ」である。

あの後他の属性についても探りを入れてみたのだが、初歩の初歩に関してはどうも手ごたえがいまいちであった…その点については最終的にメルツェルは「属性特化である」を考えた。

つまりは「風及び雷」に特化した代償として他の属性の容量は捨てた、ということ…これはたまにあることで、他の属性の魔法に関してはドットクラスの一部は使えるがそれ以外はからっきしだという。器用なのか不器用なのか…どちらかといえば不器用な類であろうか。

「それじゃあ今日は撤退かな?今日の夕食は?」

「火竜のフルコースとおっしゃっておりました。」

「…今年も一層と無茶をするな。まぁ5歳って色々と特別だろうか

らしょうがないか。」

ブレイブとリリウムの誕生日は以上のほど豪華であることはいつものこと、さらに5歳…貴族としての第一歩となる歳であるから気持ちはわかるが…家の者達にもそれを与え、さらには領地内の民には祝い品…少しだけでいいから、それのお金を領地拡大に使うのがある意味「貴族らしい」といえるのだが…だが。

「…ま、そんなお父様やお母様が僕は好きだ。」

「…同感でございます。」

――――――夕食の時間、食堂にはブレイ家含め家の者が一堂を介している、こうして同じ場で子供たちの成長を祝う、毎年の恒例行事だ。

中央のテーブルにはブレイ家が、周りを囲うようにして家の者が食事をするテーブルが。

…その一角にあるメイド達が座るテーブルに座る若いメイドの様子が不意とブレイブとリリウムの目にとまった…大層に戸惑っている様子だ。

おそらくこの「平民と貴族が同じ場所で、同じ食事を食すこと」に困惑しているのであろう…実際、家の者と一緒に同じ食事をすることは珍しい…というより、しない。

そんな若いメイド…フランシスカの右隣にいるベテランメイドのフィオナが苦笑しながら状況を説明した。

「毎年、ブレイブ様とリリウム様の誕生日にはいつもこんな感じなのよ。」

「毎年!?毎年メイドがこんなに豪華な食事を出来るんですか!?」

「そう、知っての通りヤン様は大の子供好きだから。でも今年はこ

れまでに一番豪華ね。やっぱり貴族として5歳っていうのは特別だからかしら。」
「5歳…杖契約のお歳ですね。」
「メイジとしての第一歩…でもメルツェルが随分と書物を読みあさってたけど…何かあったのかしら?」

一部の困惑も時間とともに通り過ぎ、夕食の時…ヤンがブレイ家一同の前に立ち、祝辞を述べ始める。

「本日は記念すべきブレイブとリリウムの生誕5周年の日だ。貴族として、メイジとして、何より人としての一歩を踏む今日という日に…乾杯。」
『乾杯』

ブレイ家の者に配られた火竜のフルコース、おまけにブレイ家領地で作られているワインもあるとなると、フランシスカの驚きも納得か。
その後は慎ましく食事が進み、大体の者が食事を終えた直後に見図り、ヤンは再び一同の前に現れた。

「さて…皆も知っている通り、ブレイブとリリウムはこの日を持って記念すべき5歳の歳となった。貴族として、その歳はメイジとしての始まりともいえる…と、いうことで、今この場で魔法の実演を2人にはやってもらいたい。」
「ここで…でしょうか?」
「そうだブレイブ。…夢だったんだよ!家の者全員でメイジとしての始まりを見届けることが!ブレイブもそこまで実演していないし、リリウムは属性魔法の行使はこの時が初めてとなる!すごくわくわくしているよ!」
「それは私も同じ…2人の魔法を見せて下さいな。」

そのブレイ夫妻の言葉に呼応し響く使用人たちの拍手、さすが親バカ…もはや人達の心にまで訴えかけるとは。
そして相談の結果リリウムが最初に行うこととなり、次にブレイブが行うこととなった、単純に最初の時間のかかりそうなリリウムをシフトしただけの話である。
使用人たちがテーブルや皿をせっせと片づけ、食堂は瞬く間に広い空間が広がるだけとなった。
そして空間の中央にリリウム、そのそばにメルツェルの配置となる。

「確認します。コモン・マジックはいかがでしたでしょうか？」
「さきほどかくにんしましたが、どれもせいこうしています。」
「そうですか…やはり2人には魔法の才がありそうです。それではいきなり属性魔法へと入ることといたしましょう。」
「りょうかいしました。」
「最初の属性は…土、にいたしましょうか。」

これはメリーが土のトライアングルであるから、基本的に魔法の属性資質は親の遺伝である。
ということは考えられる属性は土か風、ブレイブは一方の風の資質から雷になった、と考えられる、一方が風であったならもう一方は土…単純ではあるが、大体はこれが当てはまる。

「それでは土…それでは基本の錬金をおこなってもらいましょう。」

そう述べメルツェルはリリウムの前に小石を置く…錬金、ゼロの使い魔において比較的よく使われる魔法、大体の土メイジは簡単そうにやってのけるがやっていることは原子に干渉しいじくりまわすこと、と大人にも理解しがたい行為…謎の多い魔法でもあり、便利な魔法でもある。

リリウムが持っているのは普通のワンド、リリウムは杖の「二重契約」という荒業を行っているのだ…ただ一般的ではないだけであり、出来ることはできる。
だが杖との契約というのは何日もかけた行うもので、ただでさえ一本の杖と契約を行うのに時間がかかる上にもう一本、となると大変なもの…なのだが、このワンドはリリウムが4歳…つまり約1年前に契約を行ったもの、こちらに関しては今更時間をかける問題はなく、実質5歳になって契約を行ったのは先ほど持っていた銃と杖のハイブリッドである。

「金属は青銅、スペルは”イル・アース・デル”です。青銅の質感、見た目、色…どんな情報でもかまいません、魔法の基本は情報からのイメージ、博識であるリリウム様にはできるはずです。」
「…やってみます！……イル・アース・デル！」

スペルが唱えられ、リリウムが杖を少しばかり力みながらも杖を振るう…すると、目の前にあった小石は瞬きを2、3回ほどする間に錬金され、目の前には…小石の代わりに独特な青銅食が輝く金属…名の通り青銅が存在していた。

「おめでとうございますリリウム様…ふむ、5歳が作ったものとは思い難い質の良さですな。」

メルツェルは錬金された青銅にディテクトマジックで調べながら述べた。
錬金のレベルの目安として「質の良さ」が関係してくる…いかにその金属に含まれている不純物が少ないか、いかに高等な金属が錬金できるか…青銅は初歩的な金属で錬金が簡単だが、その質は高かった、つまり不純物が少なかった、ということ。
無事に魔法に成功したことにブレイ夫妻はじめ使用人たちから拍手

され、リリウムは顔を少々ばかり赤くする。
ブレイブも拍手…だがブレイブにはある程度予想はできた、リリウムを有している「マジックアイテムを作るスキル」…これを考えれば、おそらく土の才はあるであろう、と。
土は錬金の存在もあり「作り出す魔法」が多い、ゴーレム然り、錬金然り…もちろん他の属性にも言えることではあるが土はそれが一番多いであろう。
つまり「作り出す才」があるリリウムには土の才が多分にあったのであろう。

「では次は…水にいたしましょう。」
「！…はい！」

水、という言葉に反応したリリウム…彼女自身が欲しいと思った水属性の力…彼女が心から願った…「メイジの力でメリーを楽にすること」、リリウムは一層と気合が入る。
今度は使用人によってリリウムの目の前にはバケツが用意される、あの中に水を現出させる…それが目標だ。

「それではこれからコンデンセイションの魔法を行ってもらいましょう。イメージはいくつにも散らばっている水の欠片を一点に集め現出させるイメージです。」
「…水蒸気を集めて、それを水に。……コンデンセイション！」

一層と力強く唱えられたスペル…そしてその期待に応えるように、バケツ内の水蒸気は一気に液体へと様変わりし、バケツ一杯に液体である水が出現した。

「おめでとうございます。水属性の才もあり、ですか。」
「やった～！」

そしてリリウムはその言葉にいっぱいいっぱいの笑顔で喜びを振りまく…そして娘のかわいらしい様子にほっこりする使用人一同、さらにリリウムの水属性を極める目的を知る親2人はあまりの嬉しさに涙…特にヤンがメリーと比べ物にならないぐらい涙を流している。…やはりどう転んでも親バカである…そしてブレイブは兄として、生前は親友としてリリウムにサムズアップ、リリウムもそれにサムズアップで返事をする。

「2つの属性において資質を見せている、となると…おそらく他の属性は見込めないかもしれませんが…念のため火の属性に関してもやってみましょう。」

「はい！」

「唱える呪文は発火、スペルはウル・カーノです。」

すると今度はリリウムに目の前に一本の大きめの蝋燭が用意される…課題はこの蝋燭に発火すること、つまり火を灯せということだ。

「イメージは炎の燃え盛る中に散る火花を大きくするイメージです。」

「…おそらくライターでいいのかな……ウル・カーノ！」

リリウムがスペルを唱えた瞬間…蝋燭の先に、小さな灯が生まれた…つまり成功である、ということだ。

「ほう、火も資質あり…土や水ほどではないにしろ。…いやはや、リリウム様は非常に多才でありますね。」

「ありがとうメルツェルさん。」

その後ダメ元で風の魔法「ウインド」も行ってみると、かすかなが

ら微風が発生するだけであった。
つまり一応としては４属性に広く才があるが、特に土と水の才が多分であった、ということ…まぁリリウムにとっては、何より「水」の才があることがうれしくてたまらないだけだが。
リリウムの魔法実演が終わり、ブレイ家の皆から一層と強く拍手が送られる…若いながらも才があったリリウムへの純粋な賛辞だ。
そして次はブレイブの魔法実演、属性も理解しているので楽なはずなのだが…問題は威力の「強さ」だ。
初めて属性魔法を唱えたはずなのにもかかわらず簡単に人を吹き飛ばせるであろう威力のストームを行使し、なおかつ精度の高いライトニングを放ったブレイブ…ライトニングに関してはこの場を火事に擦る可能性があるので却下、となると…

「…おそらくウインドだったらだいじょうぶ…かもしれませんが。」
「おにいさま、でしたらわたしのかみをかぜでなびかせてください。」

そう提言したのはリリウム、おそらく最下級のウインドであったらあれだけの威力は出ないとは思われるが…あの威力を知っている３人は不安である。
しかしリリウムは自分で決めたことならてこでも動かない信念を持っている…内心はひやひやしながら、リリウムがブレイブの目の前に立った。
以上になぜか慎重である。

「…風、空に流れし存在。風、言葉を伝えし存在。風、我の言伝に従い流れよ。…ウインド。」

きっちりとした詠唱をゆっくりと行い、ブレイブはリリウムの「髪」に向けて杖を振った…はずなのだが…。

ビュオオオーーーー！！
流れるはそよ風には程遠い暴風、先ほどのストームよりは弱いが、比較対象が大きいだけのことであり、このウインドは一般的に言われるストームのレベルの風だ…つまり

「きゃああーー！」

こういう風に子供を吹き飛ばすことなど些細なこと、つまりリリウムは暴風によって空中に放り出されてしまったのだ。
そして重力の法則によって地へそのままに落ちようとしたリリウムの体、それにいち早く反応し、そして対処をしたのはメルツェルでも、はたまたブレイ夫妻でもない…。

「レビテーション！」

杖を一層と力強く振り、人間からかけ離れた反応速度で浮遊の魔法をリリウムに唱えたのはブレイブ自身…おそらくある程度こうなると考えていたからの行動の早さであろう、だがやはり人間というのは不思議な生き物で、大事な人や自分が棄権に晒されている時は思いもよらない力を発揮するものである。
浮遊の魔法によって床から１０センチぐらいの高さで制止し、周りの者は安堵に包まれる、メルツェルやヤンもぬきかけた杖をしまい、急いでリリウムの元へと駆け寄る。

「大丈夫か！？リリウム！？」

特に顕著だったのがヤン、生粋の親バカである彼にとっては目の前で見た子供の危険にさらされた事態は一番心臓に悪い。
血相を変えながら質問をするヤンにリリウムは不変なるにこやかな笑顔で「大丈夫」と答えた。

「ごめんリリウム…ぼくがあまりせいぎょできなかったせいで…。」
「いいよ、だってにいさまがたすけてくれたでしょ？」
「やはりブレイブ様は風の制御が急がれますね。ライトニングに関しては制御が行きとどいているのですが…。」

風の強すぎる力とは一線を画しまるで雷の愛されているように操ることができるブレイブ…やはり属性は「雷」であるのか、とメルツェルとヤン、それにブレイブは思案する。
その日はその魔法実演でお開きとなり、使用人たちはそれぞれの仕事に戻って行った。
ヤンはその後も調べ物…おそらく「雷」の属性について調べ、メルツェルも同じように書物を読みあさる。
そしてリリウムとブレイブ、特にリリウムは初めての魔法行使の日で精神力を使い果たしたためか、その日はいつもより早く眠りに就いた。
だがブレイブは…

「この本は戻しておいてください。」
「了解しましたブレイブ様…ですが、夜更かしはしばらくは禁止ですよ？」

エイと共同でヤンと同じように書物を読みあげていた…「雷」の属性という特異性、それを解明するために。
だが結局として1週間が経過しても目ぼしい情報は見つからずじまいであった。
そして誕生日から1週間後…虚無の曜日に、その事態は起こった。

…突然として、リリウムが倒れたのである。

オッツダルヴァ家兄弟の魔法指導

――――――ブレイ家の庭先…ヤンは領地視察へと赴き、おそらくメリーはゆっくりと時が流れる様を感じている最中、ブレイブはマクシミリアンに、リリウムはメルツェルに直々の魔法指導をしてもらっていた。

マクシミリアンは風と土のスクウェア、メルツェルは水のスクウェア、ブレイブの属性は雷ではあるが根底には風が息づいている発展型の属性、メリーは多才でありながらも自分が目標として極めたい属性は主に水、まさに各々の2人には適役であった。

…それに、この2人ほど斬新で、なおかつわかりやすくて、ある意味度肝を抜いている魔法理論はないであろう。

「それではリリウム様…まず、水属性の大きな特徴を述べてみてください。」

「はい！みずをじざいにあやつるのはもちろん、ひとのからだをいやすちからもゆうしています！さらにかぜぞくせいとのごうせいによって、こおりのぞくせいもあやつることができるというためんせいももちます！」

「合格です。やはり勉学の面に関しては何も言うことがありませんね。」

言うことはなかった、水属性の大きな特徴は文字通り「水の操作」、そして追加として「治癒の力」がある…氷属性に関してはある意味おまけ要素ともいえるが、ここまでを知識として習得し、何より理解することが水メイジとしての第一歩であろう。

「では水を操ることに関しては一端放置しましょう。今回私が注目するのは…水だけが持つ治癒の力に関係することです。」

この魔法が息づくハルケギニアの世界で一般的な生活に根付いている魔法…それは土の魔法と水の魔法だ。
風と火というものは主に戦いにおいて有用される魔法である、風で薙ぎ払い、火で焼きつくす…戦場では非常に頼もしいが、はたして戦いがない生活においては要求されるのであろうか、と言われれば強く肯定はできない…使いようによっては生活の役には立つであろうが、どちらかといえな何かを「破壊」したりする魔法の部類だ。
だが土と水はどうであろうか…確かに戦いにおいて攻撃にも利用できる魔法の部類だが、どちらかといえばこの属性の魔法は生活で要求される魔法。
土で何かを作り出し、水で人々を癒す、または水を作り出す…土の例は錬金、水の例はヒーリングやコンデンセイションなどか…水の場合はヒーリングがほとんどだが。
さらにここから絞り出してみよう…今回メルツェルが注目したのはヒーリングの部分…水だけが持つ特権の「治癒の力」だ。

「水は人間の体と密接に関係しています…水の存在がなければ人は生きていけないのですから当たり前ですよね。そして人の生と背中合わせな存在であるから水は人の体に干渉できる…これが私の持論です。では、水の人に干渉する力は果たして治癒だけなのでしょうか？」

答えはノー、根拠ももちろんある。
根拠は水属性魔法の１つである「スリープ・クラウド」の存在だ…これは治癒の力などではなく、人を眠りに誘う雲を作り出す魔法…つまり人の「体」に干渉する魔法である。
ここで浮上するのは人の「心」に干渉する魔法…「ギアス」…強力な催眠魔法だ。
だがここで「心」という抽象的な表現はいかんせん語弊を生む…人

はなぜ考えることができるか、なぜ感情を表すことができるか…心とは、現実的な表現をすれば「脳」である。

つまりこのギアスは「脳」に干渉…つまり催眠術ともいえど「体」に干渉することに変わりはないのだ。

他の例としては「仮死の魔法」や「フェイス・チェンジ」…前者は単純に人の「生命活動」に干渉する魔法、後者は人の「顔」…つまり「体」に干渉する魔法である。

こうして例を上げたとおり、水とは人の体に影響を及ぼす唯の魔法である…この結論に、メルツェルは注目した。

ならばこれを応用し、もっとほかの可能性を探れないであろうか…そう模索した結果、メルツェルはスクウェア以上の「高み」に達した。

…とは言っても、水のペンタゴンのなったわけではない、水属性の究極の応用術を編み出したのだ。

「今から行う水属性魔法は私のオリジナルスキルです、活目してくれれば幸いです……言伝、水面に波紋を呼ぶ。水、その存在に祝福を与えたまえ。水、その力は変化と不変を司るもの…イル・ウォータル・グランデ・ブースト……マッハ！！」

するとメルツェルの姿は言葉通り一閃し、気付いた時にはリリウムの背後に陣取っていた…そして遅れながらリリウムに流れる風、彼が行ったのはいわば「高速移動」で、彼の高速移動によって押しだされた大気が風となった…視認できなかったほどの速さ、まさに高速である。

移動したことによってたなびいたマントが、メルツェルに美形かつスレンダーな体系を強調させ、彼を美男子である、という事実を見せつけられるはずなのだが、リリウムのマイペースさは相変わらずで、目の前で起きた事象にただただ目を輝かせていた。

「これが私のオリジナルスペルのマッハ…水の力によって体に干渉し、一時的な身体能力の向上を行いました、この場合は俊敏さを端的に向上させたことによる高速移動です。」
「すごいですメルツェルさん！」
「お褒めにあずかり光栄です。」

これは本当にすごい話である…高速移動、という単語を聞いて原作知識を持ったリリウムが何を思いついたか…正解は虚無の魔法の一種、原作ではジョゼフが使っていた「アクセル」の魔法だ。
あれも名の通り自分の体を「加速」させる魔法であるが…あれは自分の体を加速させたのではなくて、おそらく空間に干渉した魔法、空間に干渉することによって自分の体を空間から独立させて移動する…そう、「仮面ライダーカブト」で出てきた「クロックアップ」の理論、というよりそのまんまである。
しかし先ほどメルツェルが行ったのは純粋な身体能力強化による高速移動…つまりは「仮面ライダー５５５」のアクセルフォーム、「仮面ライダーＷ」のアクセルトライアル、「仮面ライダーＯＯＯ」のラトラーターコンボ…これらと先述のクロックアップとの相違だ。
おそらく「どちらか早いか」と言えば、軍配が上がるのはクロックアップ、つまりは虚無魔法の「アクセル」であろう…なにせ別空間を移動しているのだ、それも雨粒がほぼ制止する速度である。
さらにクロックアップの上位に「ハイパークロックアップ」が存在する…速度を極めた結果行きつくのは「時間移動」…光を超え、万物の速さを超えた先に待っているのが「時間」である。
それを超えるハイパークロックアップ…速さのレベルを超えたそれに、叶うはずがない。
だがこの魔法を作り出したことは偉大だ、何せ幻と言われた虚無の魔法、その魔法の一種に準ずる効果を発揮するのであるから…「加速」の魔法とは違い体を使うので疲労は残るし速度も負ける、しかし「準ずる」魔法であることに多大な意味がある。

いわば疑似虚無の魔法ともいえる部類、それを作り出す個人…改めてメルツェルがなぜロマリアから「異端」として追われているか…認識した横から様子を見ていたブレイブであった。

「もちろん能力強化は俊敏さだけではありません…腕力、脚力、走力…あげればきりがない、つまり可能性は無限大です。これが水メイジとして行きつく極みである、と私は思っています。…しかしこれらのスペルは非常に難しい、なにせもともとは”なかった”魔法ですからね。しかし発展すればこの強化魔法は容易になると思います、やっていることはいわば”体の中にある水分の操作・干渉”…初歩である凝縮と大差ないのですから。」

「…どれくらいのぎりょうになればかのうだとおもいますか？」

「…理論としては、凝縮と変わりないのですが…いかんせんイメージが難解な魔法ですから未知数なのですよ、なにせ使うのは私だけですから。」

「…つまり、ラインとかからでもつかえるかもしれない、ということですか？」

「可能性、ですがね…しかしこれを発展させるのは次世代の仕事、リリウム様には期待させてもらいますよ。」

「はい！のぞむところです！」

「ということでまずはリリウム様の目標は水を自在に操る技量になること…コントロールを極めれば、治癒の力や強化魔法を使えるようになりますからね。」

こうしてリリウムは練習を続行する…やっているのは凝縮から作り出した水を、フォースによって操る段階練習、凝縮によりバケツの中に液体上に水を現出させ、念力で操作する…念力が魔法の根底に大きく根付いている、と考えているメルツェルいわく「面倒な手間だが、イメージを大きく固めるのには有効」であるらしい。

これによって、水の壁や鞭を作り出す…要はウォーター・ウォール

やウォーター・ウィップの練習だ。
まだリリウムは念力の繊細な操作に慣れていないようだが…この単純作業に慣れれば、いつの間にか水属性魔法の基本を習得し、なおかつ小さいながらも二度手間による多めの精神力負荷を科せることによって精神力強化を行う。
それはブレイブも同じなのだが、ブレイブが目指すのは制御を極めること…力は十分、しかし制御が成っていなければ元も子もない。
そう、「仮面ライダーディケイド」に出てきたヒビキさんのように、鬼の力に呑まれることとなる。
指導をするのはマクシミリアン、彼もまた優秀な風のメイジであり、彼はとにかく技術の追求を行ってきた努力家である。
「可能性」を求めたメルツェルはいわば学者、「技量」を追求したマクシミリアンはいわば探検家…という異色なコンビであるが、彼ら各々の存在があるからこそマクシミリアンとメルツェルのオッツダルヴァ家兄弟が確立しているのだ。

「ブレイブ様の目標は風の完全なる制御…試しに、ウインドを唱えてみてください。」
「わかりました……ウインド。」

ブレイブがスペルを唱えた瞬間、庭には人を吹き飛ばすことが容易なほどの暴風が吹き、範囲が狭いながらも庭の草を刈り取った。
しかしマクシミリアンが見るのは「結果」ではない…魔法を唱える間の「経緯」である。
顎を撫で「ふむ」とある程度納得したのかマクシミリアンは言葉を紡ぐ。

「やはりブレイブ様の魔法行使には精神力の無駄が多分にありそうです。」
「しかしひろうかんはかんじませんが？」

「それはブレイブ様の精神力が膨大であるということです、ストームレベルの風を5歳で唱え、なおかつ疲労がない、となるとまるで始祖ブリミルの加護でも受けたようですね。…とは言っても、私はブリミルの信者などではまったくないのですが。」

この発言をロマリア関係者に述べたらどんなことが起こるのであろうか…答えは「その関係者が両名を捕えようとした瞬間に風の刃によってミンチにされる」が正解である…彼は容赦を知らない、自分の道に立ち塞がる壁をどんな手段を用いても叩き壊す、そしてどんな壁であってもためらいはない、残酷で非情…彼の戦場での姿を知る者は口をそろえてこう述べるが…オッツダルヴァ家兄弟は現在没落貴族、本来ならばトリスタニアで大きな犯罪組織でも創立させてそうだが…彼等は現在ブレイ家直属暗部組織「ＯＲＣＡ旅団」のトップの君臨する…そしてブレイ家領主のヤンとメリーの一番の忠臣でもある。
彼らには何があったのか…それを知る者がごく一部、彼らの過去がブレイ家の兄妹に語られる日は来るのであろうか…閑話休題。

「話に戻りましょう。そもそも魔法のコントロールというのは、いわば精神力の出力を変化させること、そしてイメージをその都度変化させること、この二つが重要視されます。おそらくイメージは十分でしょうが、問題は出力変化の慣れにあると思います。」

どれだけ精神力を使えばどんな威力となるか…これぱっかりは経験に左右されてしまう、なにせ理論で説明は難しい、感覚が一番重要となってくるからだ。

「これに関してはとにかく鍛錬あるのみです。とにかく無駄を極限まで省き、もっとも効率的な運用を目指す、その高みに近づけばおのずと魔法のコントロールは容易なものとなるはずです。忍耐が大

事となってきます…もちろん、習得には個人差が多分にありますが、ブレイブ様でしたらすぐに高みに達すると信じていますよ。」

「ごきたいにそえるようがんばります。」

その後はとにかく基礎固めの連続、エア・カッターやトルネード、長時間のウインド行使…単純であるが、やはり回数を重ねるのが重要…特に幼少の子供というものはスポンジのように知識と経験を吸収する能力がある。

子供のころのトラウマ、というものは死ぬまで引きずっていることがほとんど、それと同じで子供でいるうちに積み上げた経験や知識は強く根付いている。

――――――こうしてさらに1週間、ブレイブとリリウムが各々のやるべきことをやっていた最中…それは突然に起こった。

「ブレイブ様！」

「！どうしたフィオナ！？」

ブレイ家のメイドの1人であるフィオナが、彼女らしからぬあわてようで、それも血相を青くしながらブレイブの元に飛んできた…文字通り風属性の「フライ」でだ。

彼女も没落貴族の1人…幼少時代にフィオナの相棒であるアナトリアという兄とともに孤児院に捨てられ、様々な経緯がありＯＲＣＡ旅団のメンバーとして働いている。

捨てられても貴族の子供、両名とも魔法を使える…フィオナは風と火のトライアングル、アナトリアは…驚くなかれ、四属性すべてトライアングルだ。

彼女は同時に冷静な仕事人としての一面も持ちつつ、温かな優しさを持つ才色兼備な女性…だがフィオナが滅多に使用しない魔法まで使いすごい速さで飛んできた…となると、一体何が起こった、と言

いたくなるものだ。
ちなみに現時刻は早朝、リリウムよりいつも早く起きるブレイブはいつも早朝の魔法訓練を自主的に行っている…それぐらいしかやること及び興味のあることがないからだ。
今はちょうど雷属性の魔法のコントロール練習を行っていたところ…ブレイブは人に見せかけた案山子みたいな人形の周囲に雷雲を作っていた…知っている人はわかるであろうか、イメージは「仮面ライダーW」に出てきた怪人「ウェザー・ドーパント」の対象を包囲し雷で攻撃するリング状の雲である。
魔法というのはイメージの具現化、人並み以上に仮面ライダー関連の知識があるブレイブとリリウムにとってはこの知識はイメージのいい参考になった…その一つがこれで、アクセルトライアル並みの速度と動体視力がなければ並みのメイジには対処は難しい…包囲されれば魔法を唱える前に雷を撃てばいいのだから。
だがその詠唱の間を突くまでの速度で雲を作り上げなければいけない…これも鍛錬である…この様子を見ていたメルツェルとマクシミリアンらのＯＲＣＡ一同は純粋に驚いていたが。
未知の属性、もう一つの幻の属性と呼ばれた「雷」…謎に包まれているその属性を習得し、桁違いな風属性の力を５歳で手に入れた…これだけでも拍手にも関わらず、未知の属性の「雷」のオリジナルスペルをさっそく作り上げた…周囲からみれば「天才」ともいわれる…ブレイブにはあまり自覚がなく、「人を吹き飛ばせるウインドってカリンさんじゃん」と公式チートのヴァリエール婦人の顔を思い浮かべていたが…。

「大変です！リリウム様が…熱をお出しにしながら倒れました！」
「…それって風邪なのでは？」

…貴族とはもてはやされても人間である、けっして怪しそうな雰囲気を出しながらアンノウンを繰り出してくる神のような存在でも、

神に近しい力を手に入れたアギトでもない…もちろん病気を患う、特に風邪なんかよくあることである。
だがこのブレイ家のブレイ夫妻は巷で有名な親バカ兼おしどり夫婦…子供の調子がすぐに悪くなれば、迅速の速さで優秀な水のメイジを呼び寄せて治療をさせる…ブレイ家の場合はＯＲＣＡ旅団のメンバーからメルツェル…だがメルツェルは雑務のためよく遠征していることがあるので一番多く呼び寄せるのはセレンであろうか。
彼女も優秀なトライアングルの水メイジ…それにＯＲＣＡ旅団の中で一番治癒に特化したメイジだ。
彼女の制作する「霞印の秘薬」は貴族でも有名かつ効果が高い水の魔法薬で、この魔法薬の売り上げがＯＲＣＡの財政の一端を担っている。

「それが、起きて３０分ほど経過した時、急に頭を抱えて苦しみだして！それにすごい高熱なんです！おそらく風邪とは違う症状だと思われます！メルツェル様も様子が変だとおっしゃっていますし、シャミアもこの高熱は異常だと！」

メルツェルは高等の水のメイジ、彼のスキルの一つとして人の体内の「水」を見ることで体の様子をディテクトマジックよりも詳細に知ることができる「水の調べ」というオリジナルスペルがある…そのスペルの精度の高さであったら信用できるし…シャミアは火のスクウェア、火のメイジというのは人より温度に敏感である、その高等メイジが「変」だというのだから…今回ばかりはヤンの早とちりではないかもしれない、とブレイブは不安を抱いた。
その報告に理解の意を示したブレイブは、フィオナと両名でフライの魔法によって言葉通りリリウムの元まで飛んで行った。

…到着は一瞬であった、リリウムが横になっているという部屋に飛び込んだブレイブは、リリウムの様に思わず駆け寄って「大丈夫か

！？」と大声で、それもいつもの落ち着きを振り払い叫んだ。
リリウムの体全体に熱を感じ、吐息はエアコンの換気扇から放たれる風として思えないほど熱を持っていた…人が発しているとは思えない熱量…異常である、ということがすぐさま理解できてしまった。その様を見てまるで世界の終末を迎えるかのような形相となっているヤンとメリー、それを静かに祈りながら見守る使用人たち。
「水の調べ」によって体の状況を大体把握したメルツェルは、ブレイ夫妻に状況を説明する。

「おそらく風邪ではありません…そして、ただの病気でもない。体全体に異常があるのではなく、脳に何か支障が出ていることで危険信号を発していることはわかるのですが…いかんせん原因が…。」
「お願いだ！！ブレイの財産すべてを、すべての人員を使いはやくリリウムを助けてくれ！！」
「もちろんです！…ＯＲＣＡ諸君に集合の命を！！」

ＯＲＣＡのトップ2からかけられた収集の命…それは神速の速さで広まり、現在この場に残っている、要は外出していないＯＲＣＡメンバーが一斉に集合した。
学者、メイジ、歴戦の戦士…ある意味圧巻である。
現在ブレイ家にリーダーであるマクシミリアンはいない…用事によりアルビオンまで遠征しているのだが、この言伝を聞けばすぐさま飛んでくるであろう。
それはほかのメンバーも同じ…ＯＲＣＡの最上位行動目的として「ブレイブとリリウムの守護」がある…これはもちろん、こうした事態にも対応するのだ。
何より自分たちの可愛い子供分、妹分を助けるために…。

「ＯＲＣＡの諸君！これから各自に作戦行動に移ってもらう！作戦コードは３１５！目的はリリウム様の現在の容体の原因を爆熱的に

に解明し、爆熱的に対処法を見つけ、爆熱的に行動を実行すること！各自行動に移れ！」

『サー！！』

こうしてリリウムを爆熱的に治療する作戦、作戦コード「３１５」が発令された。

続：検索を始めよう（前書き）

standing by…

続：検索を始めよう

――――――ガリアとロマリアの国境に陣取る広大な山脈…名を「火竜山脈」という。
国境に存在する、ということで必然的に2つの国を結ぶ街道は存在するのだが…この3人が歩いている場所は完全に街道から外れた場所…それも山脈の名に恥じず火竜の発生地域…と、危険極まりない場所だ。
火竜…「火竜山脈」に分布する竜で、ご察しの通り火を吐く生き物だ、ハルケギニアの竜の種類に「火竜」と「風竜」が存在するが、この2種の相違と言えば主に「飛行速度」と「ブレスの威力」であろう。
一般的には火竜が飛行速度で風竜に劣ってしまうが、その代わり炎のブレスは威力抜群…風竜はきれいにその逆のステータスを特徴とする。
もちろん性格は猛々しい、縄張りを侵すものは容赦なく炎で焼き尽くす、その様は竜の名に恥じないもの…つまりそんな生き物が発生する地域にいるこの3人は本来なら危険なのだが、今のこの4人にとっては火竜は大歓迎である。
彼等はブレイ家直属の暗部組織「ＯＲＣＡ旅団」のメンバー…フィオナ、アナトリア、それにワンだ。
彼らの目的は「火竜の血液を採取すること」、生命力が強い火竜の血は秘薬の材料になるらしく、要望としては「とにかく大量に」と言われている。
作戦コード「３１５」…リリウムを謎の病気から救い出すこの作戦の方向性としては、とにかくあらゆる種類の秘薬を作り出し試すこと、だ。
何せ今回のリリウムが突然患った病は原因不明、さらに水のスクウェアであるメルツェルの、果てにはＯＲＣＡ旅団一の治癒メイジで

あるセレンでさえ治癒できない病…となると、過去の文献からでもとにかく強力な秘薬を試すほか行動の仕様がなかったのだ。
その経緯がありＯＲＣＡの各メンバーは東西南北駈け廻り、幻獣の血液や薬草など…とにかく材料探しに必死である。
特にこの場にいるワンの必死さは顕著なものである…彼、老人であるワンにとってはリリウムとブレイブは孫のような存在…彼は7年前に唯の孫を失っており、そんな傷心の彼にとってはその後生まれたブレイ家の子供と失った孫の影が重なって見え、それ以降孫同然に可愛がっていた。
だが突然孫が倒れた…となれば祖父というものは誰だって不安になる者、特に一度孫を失っているワンの慌てようはすごいものだった、まさにその様は祖父そのもの、ブレイ夫妻と同レベルにおどおどしていたのだから。
だが彼も歴戦のメイジ、これからやるべきことが定めれば行動するのみ…こうしてＯＲＣＡ旅団のメンバーの中でも一層と強くやる気をみなぎらせながら奮迅しているわけである。

「…いました、およそ１００メイル先。」

そう述べたのはフィオナ、彼女は優秀な風のメイジで、風のメイジ特有のスキルである「音の敏感さ」を利用して周囲の火竜の気配を探っていたのだ…幸運にも火竜を近くに発見したらしい。

「…では私が竜の動きを束縛する、アナトリアはその隙に一撃決めてやってくれ。」

そのワンの提案に無言でうなずき了承の意を示すアナトリア…確かにこの作戦では一番力んでいる存在であるが、戦場まで私情を持ちこまないのはベテランの決断であろう。
アナトリアはなぜ言葉を発しないのか…正確にはアナトリアは先天

的に話すことが叶わない体なのだ。
彼はこの世に生を受けたときからしゃべること、光を見ることが叶わなかった…言語を話すことができず、盲目の彼、その後彼とフィオナの一家が堕ち、フィオナとアナトリアは神父の御好意で教会で過ごすこととなる。
そして突如として目覚めた四属性の優れた魔法資質…だがこの覚醒はおそらく必要とされたものであったとフィオナは考えている…四属性の優れたスキルによって得られる温度や音に対する優れた感覚…これにより目の代わりにしようと人間としての本能がしたのであろう…皮肉であるが、なんとも優秀な本能である…閑話休題。
火竜の元に接近し、火竜が視界に入った瞬間…ワンは持ち前の風と土のトライアングルの資質を用い、火竜に向かってスペルを詠唱し始めた。

「風は万物に取り巻く存在。土は万物と共に生きる存在。風と土、それらは人と共にあり……アース・バインド！」

その詠唱の直後…警戒心をむき出しにしワンに向かい威嚇をしていた火竜の足元から、無数の土から出来たロープが発生し、火竜の体をあっという間に束縛、火竜は無情にも動きを止めることとなった。
土、土、風のトライアングルスキル…土属性魔法の「アース・ハンド」と風属性魔法の「拘束」の合成魔法の「アース・バインド」である。
束縛力に定評があり、熟練したメイジが作り上げたバインドならば火竜のような強靭な生物でも断ち切れないものができあがる。
時間はたっぷり、そして…アナトリアの詠唱の時間稼ぎにとっても非常に十分な拘束であった。
アナトリアは心の中で詠唱を行い、精神力を高めていく…これから行うのは彼のオリジナルスペルであり、その威力はスクウェアの魔法にも劣らないと言われたものだ。

彼が杖を天にかざした瞬間…彼の右には竜の姿をした炎が、左には相対するように竜の姿をした土の粉塵によって現出させた風が…これが彼のオリジナルスペル…火、風、土の規定外の3種のトライアングルによるスペル、名を「トリニティ・ドラゴン」と呼ぶ。
この名付け親は、実を言うとアナトリアではなくブレイブ…彼は言葉を介すことができない存在のため、魔法に名をつけることは今まで行ってこなかった、だがこの魔法を見たブレイブが「それはもったいない」と言い、彼がこの魔法の名付け親となったのである。
…ご存知の通り、名の元ネタは「仮面ライダーアギト」のトリニティフォームからだ。
アナトリアが天にかざした杖を力強く振り、向けた先は未だ土のロープにより拘束された火竜…彼の左右にいた風と火の竜は火竜に向けて突撃し…その竜がぶつかり合い爆発した直後には、威力によって一撃で倒された火竜の死体が転がっているだけであった。

――――――場所は移り変わりブレイ家の一角、ここでは連日連夜多数のスタッフによって秘薬の調合が行われている、もちろんリリウム用の秘薬である。
水のスクウェアであるメルツェルはその高い資質をここ数日はリリウムの症状緩和に使っていた…周期的に起こるリリウムの発作、リリウムが頭を抱えて苦しむごとにメルツェルはヒーリングの魔法を唱える…だが治癒はできない、あくまでその苦痛を緩和するだけしかすることができない。
しかしないよりはまし…とメルツェルはリリウムに付きっきりとなっている今、主導権はトップ3のエイに握られていた。
現在エイは使用人たち及びＯＲＣＡの指令を行っている…その一端として、エイはこの調合部屋へと足を踏み入れた。

「セレン、水の精霊の涙、たっぷりと買い込んできたわよ。」
「ありがとうエイ…コジマダケは？」

「ＣＵＢＥとカニスとダンが出向いてるわ。マクシミリアン様はアルビオンから飛んできてる、多分夜には到着するはずだから、それまで皆は全力稼働！」

『はい！』

呼応する使用人たちの返事、だが秘薬材料の独特なにおいに少々苦戦しているようらしく顔を少しだけ歪ませていた…もちろん、リリウムが嫌いで嫌がっているわけではない、だがこの強烈なにおいだけはどうにかしてほしいものだ。

特にこのコジマダケ、セレンいわく「万能」であるらしいが難点がその臭い、表現するならば「今にも１２メイルほどの化け物を操れそうな臭い」、「生態系が破壊されそうな臭い」らしい…今にも文明開化しそうだが、はたしてどんな臭いなのであろうか。

「…どれくらいは作った？」

「霞印の特製秘薬は大量に、埃かぶった文献から作った試作品もあそこにある。…まさかこんな所で、先々代の書庫が役に立つなんて、世の中どう転ぶかわからないわ。」

「知識は偉大よ？それによかったじゃない、だって…あなただって、リリウム様には死なれたくないでしょ。」

「…ああ、あまりにも寝覚めが悪すぎるからな。…それに、そんなことになったらヤン様とメリー様、それに皆が悲しむだろう。」

「ほんと、あの子はすごいムードメーカーだったのね。」

こうして裏ではドラマがあった、思いは錯綜し続ける…募る不安、重なる焦り、そして祈り…リリウムが倒れてから１週間が経過した。

――――――少女は悶絶していた、朝目が覚めたときから流れ続けた情報の波、その波が脳内を膨大な量が流し込まれ続け、幼い少女のまだいっぱいいっぱいな容量ではその量に耐えきるのに精一杯で

あった。
脳、というものは非常に多様な情報を持つ素晴らしい機関だ…脳が保管している記憶、転生者というのはその記憶量が膨大、そのためただでさえその記憶容量にやっと苦痛を感じないほどだった…だがそれをはるかに超える情報量がやってきたのだとしたら、ただでさえ飽和状態の器は悲鳴を上げるであろう、そして幼い少女の脳の中枢は焼き切れ、廃人と化す…これが順当な結末であったはずだった。だがこの運命に介入したものが数人…いや、見えない場所で何十人も…。
苦痛を少しでも解放しようと奮闘し、自分の手を握り続けてくれた両親、そして兄…かすみながらも見えるその姿に、少女はどれほど安心したであろうか。
…バタバタと走りまわるＯＲＣＡメンバー、特にいつも自分を可愛がってくれるワンなんかはその悲しむ姿は何十歳も老けこんで見えた。
メルツェルは常に杖を持ち、自分のそばを片時も離れず、自分の器がひび割れそうになった時は常にヒーリングを唱え続けてくれた…この長時間、精神力の疲労は半端なものではないであろう。
メイドのエイ、フィオナら…彼女らも薬を持ちながら常に激務に走っていたことをそばで展開されている会話から理解できた。
そしてヤンとメリー、そして兄のブレイブ…彼等は時に涙を流しながら、「大丈夫だ」を励まし続けながら手を握ってくれた…最初なんかは「私が秘薬の材料を探しに行く」と無茶を言ってそれをＯＲＣＡのみんなに制止させられていたほど。
…少女…リリウムは改めて理解した、自分の周りにはこれほど思ってくれる人たちがいる…ＯＲＣＡ旅団のメンバーに至っては、血縁者でもなんでもない他人、強いて言うなら主従を誓っている主の子供であるだけ…だが彼等は命をかけて、何日もかかる遠い道のりまで赴き秘薬の材料を探してきてくれた。
たった１人の少女のために、彼等は奮迅した、励ましてくれた、守

ろうとしてくれた…でも自分はどうなんだろうか？襲い続ける情報の波、悲鳴を上げる頭…そう、結局自分がこの事態に終止符を打つしかない…それがこの人達への最初の恩返しとなるのだから。

ここで楽になる？ノー。

半端な痛みで寸止め？ノー。

ずっと心配かけ続けでは顔が立たない、それにこの苦痛ではまともに家族の顔すら見れやしない…それだけはどんなに苦痛が待っていようがいやであった。

ちゃんと、しっかりと、五感をフルに使い人のぬくもりを感じていたい…それを感じる時が一番幸せなのだから。

…リリウムは見つめていた、まるでコンピュータの１と０がずっと並ぶ画面を見ているような感覚、まるで悠久に続かのように錯覚する苦痛、波…だが永遠なんて存在しない。

「仮面ライダーＷ」に出てきた「ＮＥＶＥＲ」…死から蘇った死人たち、その命は仮初の永遠ながらもまさに「不死」ともいえた…だが終わりはやってきた、永遠は結局仮初のままだった。

永遠は仮初のものしか存在しない…なぜ永遠と錯覚するか、それはその人自身が「永遠だ」と盲信するからである…リリウムは永遠なんて信じない、この１と０の波の先には「終わり」が絶対にある…そのことを理解しているからである。

ならば受け止めて見せよう、流れ続ける波を、人間の可能性がここで破綻することなどない！ということを証明して見せよう。

人の無限の可能性…それを、「仮面ライダー」は信じ続けてくれたのだから。

――――――丁度１週間後の早朝…虚無の曜日の始まり、リリウムの顔は活気あふれながらも静かな笑顔で、苦痛にゆがむことなく寝息を立てていた。

…リリウムの病騒ぎから２日が経過した、リリウムの体は文字通り

快調、だが体が本来持っている治癒力をフルに使っていたためリリウムは1日安静、それに甘えるようにリリウムは回復してからの1日は寝続けていた。
そしてその翌日、すっかり体調を戻し、いつもののほほんとした笑顔で挨拶をするリリウムの姿が早朝のブレイ家にあった。
この時、すっかり快調となった娘の姿をやっといつもどおりに確認できたヤンは、今までの疲れがどっと来たのか、今度は疲労によって父が倒れることとなった…まぁ、危険ではないので安心はできるが。
メリーもその笑顔を見てすっかり安堵した様子、しかし持病が完治していない状態で1週間近く寝ずにリリウムを見守り続けていたため、再び体調を大きく崩すこととなった。
生命活動に支障はないが、このことに関してはリリウムは「ごめんなさい」と自分の責任だと自責してた…まぁ、メリーに「そんなことはない」ともちろん訂正されたのだが。
謎の病気?に倒れたリリウム…いったいあの症状はなんだったのであろうか、ブレイブはもちろん疑問を持ったが、今はこうして元気なリリウムの姿があるので深く考えないこととした。
…のだが、どうやらそうも言ってはくれないらしい。
「大事な話がある」とリリウムから言われブレイブは昼食前に自分達の部屋にやってきた。
いつものように元気なリリウムの姿が見える子供部屋…再び安堵のため息を吐いたブレイブであったが、リリウムから言われた告白に、思わず「?」マークを浮かべてしまうことは必至であった。

「…私、フィリップになっちゃった!」
「…どゆこと?あれか、抑えきれぬ好奇心を生みだしてしまったのか、それともあれか?星の本棚にはいれるようになっちまったのか?」

と、当たり障りのない冗談を言ったはずであった…冗談であったはずだった。
…瓢箪から駒。

「正解！私、星の本棚に入れるようになっちゃった！」
「…はぁーー！？」

知らない人には説明しなければならないであろう…「星の本棚」、万物の知識、いわば星が有している知識すべてが管理された精神世界の一種…アカシックレコードの概念に近く、所謂人外な能力…チート。

「仮面ライダーW」の主人公の1人、「フィリップ」がこの本棚に入る資格を有しており、彼のサポート能力の一端である。
…しかし一般人が本棚に入ることなどまずない、せいぜい臨死状態の精神が紛れ込んだりすることはあるが、そもそもフィリップがこの本棚に入る能力を有するようになった経緯も事故、本来ならば万物の知識を個人が有することなど不可能である。
…だがこの目の前にいるリリウムは、星の本棚に入る能力がある、と言っているのだ。

「…あれだよな？仮面ライダーWのフィリップ君のあれだよな？」
「うん！あれ！」
「…いやいやいや、そもそもフィリップですら一端死んだことによる例外パターン、けれど…いや、もしかしてあの倒れたのって…それが関係してる？」
「…多分ね。あの時からずっと、私の頭の中に情報が流れ続けて、すっっごく痛かった！だけどなんとか全部受けきったから、私はここにいる。」
「…キーワードは、”吉川晃司”、”ハードボイルド”、”白の中折れ帽”」

「鳴海荘吉：亜樹子の父で鳴海探偵事務所初代所長。本編では名前と後姿のみの登場だったが、第３１話に顔写真とビギンズナイトの回想シーン（劇場版『Ｗ　ビギンズナイト』の映像の流用）が登場した。翔太郎の師匠で、彼から「おやっさん」と呼ばれ慕われており、翔太郎が探偵としてのみならず人間として強く憧れる存在であった。幼馴染の文音（シュラウド）から託されたロストドライバーとスカルメモリを使用して仮面ライダースカルとなっていたが、ポリシーとしては「ガイアメモリを仕事で使わない」ことにしているためにビギンズナイト当日まで翔太郎もミュージアムもその事実は知らなかったのか、彼の変身を目の当たりにして一同が衝撃を受けていた描写がある。この時に見たスカルの戦いや決め台詞は、後に仮面ライダーとなった翔太郎とフィリップにも色濃く受け継がれている。

荘吉の「依頼人の身の安全を第一に考え、依頼人には決して火の粉が降りかからないようにする」という信条は、現在の翔太郎だけでなくフィリップにも影響を与え、Ｗの行動原理となっている。荘吉とは直接会うことがなかった竜も、第３１話において荘吉の話と写真を見た際に「会ってみたかった」と呟いている。ビギンズナイトではシュラウドの依頼でミュージアムからフィリップを救出したが銃撃を受け、フィリップを翔太郎に託して力尽きた。力尽きた直後に突如現れたタブー・ドーパントの攻撃で開いた穴に遺体が落ちてしまったことから、遺体は未だ見つかっていない。そのため、彼の唯一の形見となった縁に破れのある白いソフト帽は、事務所の帽子掛けに掛かっている。ユートピアとの最終決戦に際し、翔太郎がこの白いソフト帽をかぶった。また、劇場版『運命のガイアメモリ』にてスカルが翔太郎の前に現れてロストドライバーを彼の前に置いた。後にフィリップからの別れのプレゼントの箱にもそれが収められている。翔太郎はビギンズナイトにおいて自らが荘吉の指示に従わなかったことが荘吉の死の原因と考えており、亜樹子にはこのことに関して語ろうとしなかったが、その後の劇場版『ビギンズナイ

ト』のエピソードにおいて語られたため、本編３１話の時点で亜樹子は父の死を既に受け入れている。「Ｎｏｂｏｄｙ’ｓ　Ｐｅｒｆｅｃｔ」のＰＶでは、テラー・ドーパントと戦う姿が描かれた。ちなみにこれらの文はＷＩＫＩから…」

「ストップストップ、そんなところまでフィリップになってどうする。…なるほど、それが本当だとしたら、厄介なことになったな。」

…星の本棚、それは万物のすべてが記された世界、その世界を求める欲にまみれた人などたくさんいる…特にこの欲望渦巻く貴族社会、そんなとっておき能力があって、それを信じれば誰だって欲しいと思うであろう…実際、便利ではある…少し便利なだけだ。

だが当事者はどうであろうか…映画で大道克己が言っていたが、この能力は本来人が持たざるべき力…人外の域である。

それを持つだけで狙われる、そして何より普通の人間と同じような思考をすることができない…わからない知識を見つければ、その瞬間に頭には膨大な量の情報が開示される…違和感もぬぐえないであろうし、フィリップのような「好奇心オタク」ならまだともかく、リリウムは完全な貴族の一般人…この能力を持つころで、絶対に苦しむことが起きてくるであろう。

「…覚悟はあるか？その能力を背負って、これから生きていく覚悟は？」

「…さすがに困惑はしたけど…でも考えてみて、私達はなんで転生したんだっけ？」

「…物語を破壊するものから物語を守るため。」

「そう、だったら活用できる知識はたくさんあると思うんだ。この本棚は、どうやらこの世界の知識だけじゃなくて、元の地球だったり…並行世界の地球の知識もあるらしいんだ。」

「…それはまた…チートな。」

人外技術から外道技術、人類滅亡の技術までなんでも取り揃えてあるのだろう…まさに火薬庫、このリリウムの頭からとんでもない火種も生みだしてしまうのか。

「でも悪用させる気なんて絶対ない！知ってるのは私とブレイブだけ、それにこの能力をせっかく授かったんだから使わずに後悔はしたくない…それに、やっぱりWと言えば片方は本棚を持ってなくちゃ！」

なんとポジティブシンキングなのであろうか…正直一番参っているのが本来本人でなければならないのだが、この当事者はプラス、プラス、とにかくプラスの方向に持って行っている…ある意味天才だ。だが役に立つのも事実…ブレイブがひそかに考えていた計画も一気に現実味を帯びてきた。
しかしこの業は重い…だからこそ、これからも一層と強くリリウムを守ろう、と強く誓ったブレイブであった。

「…とにかく、これからの活動方向は順々に定めようとしよう。…優梨子は俺が守ってやる。」
「…ありがとう、たっちゃん。」

…だが生前、この2人は本当に、なぜ恋人でなかったのか…謎は大きく残り続けるのであった。

続：検索を始めよう（後書き）

complete

戦闘訓練

…ブレイ家の双子、ブレイブとリリウムが5歳を迎え、リリウムの昏倒騒ぎもあったが…至って平穏な日々がその後半年続いた。
いつも通りにヤンは領地を飛びまわり、メリーは治りつつある病に実感を覚える…そして時間と共に迫る時は必ずある…大きな事件、事故…それに立ち向かうべく、リリウムとブレイブは各々メイジとしての鍛錬を重ねていた。
まずブレイブ…彼は順調に風のコントロールの感覚を覚えていった…やっとウインドとエア・カッターの制御が効くようになり…何よりすでに完成されてある雷属性の魔法についてはオリジナルスペルはじゃんじゃん開発していっていた…現在雷属性の魔法は「ライトニング」、「ライトニング・クラウド」はもちろん、オリジナルスペルは2つ完成している。
戦闘…剣の扱いに関してはＯＲＣＡ旅団の剣士である真改を中心に、体術に関しては様々な人たちに指導をしてもらっている…正直、そこらへんにいる一般的なメイジならもうブレイブに太刀打ちもできないであろう…何せ教えている人が人であるから。
それはリリウムも同じで…現在はリリウムの意向で水属性中心に魔法の鍛錬を進めている、もちろん体術も獲得していっているが…リリウムにはリリウムにしかできない仕事もある。
突如手に入れた能力「星の本棚」…万物の知識を手に入れたリリウムは、あの後はブレイブと共に考えていた計画を着実に進めていっている…今のところその計画に関してはＯＲＣＡ旅団の者以外は知らない…だがある程度ステップを踏めば両親には説明したいところだ…目途としては母であるメリーが病から完治したところ、がちょうどいいか。
…そしてブレイ家の屋敷から少し離れたこの平原…この平原で、着実に計画は進んでいた。

――――――周囲には2つの村と少しばかり大きめなブドウ畑があるだけである平原…亜人も住んでいなく治安がいいこの場所ではあるが、周囲に人は住んでいない。
だが「人影がない」ことは大変助かる…特にこの後の行動方向を考えれば色々とやりやすいからだ…とにかくこの平原には大きめのレンガ造りで出来た建物がある…ここはＯＲＣＡ旅団のいわばアジト…この場所でＯＲＣＡの主要メンバーの一部は寝泊まりし、屋敷のそばに配置することでいつ起こるか分からない不測の事態に備えているのだ。
…その建物の中にある一角、とはいっても一角というには広大な施設…だがこの場所、この広大な内部施設の光景はまさに殺風景、レンガ造りの壁が四方に並んでいるだけで、中にはまるでものがない、ただただ空間が広がるだけの場所…この場所はＯＲＣＡ旅団の訓練所及び模擬戦場である。
…最近の光景としては、この訓練所にはよく先客がいることが多々である…先客の正体は、ほかでもないブレイブ、そして剣の師である真改だ。
これから行うのは一種の模擬戦…簡単にいえば剣で勝負を行うのである…だが剣の達人である真改にまともに剣で立ち向かっては無謀、ということでブレイブには「魔法の使用の許可」というハンデが課せられている。
…だがこのメイジとしては最大の有利条件であるはずなのだが…やはり剣の達人である真改、ブレイブはこれまで少しばかり惜しいところまではいっても勝ったことはない。
そして時は満ちた、ブレイブは自分の杖及び剣を持ち、真改は自前の剣を持ち、お互いに剣を構え戦いを始めよう、と引き締めた最中であった。

「わわわ～！待って下さ～い！」

…と、先ほどまで首に剣先を突き付けられているような緊張に包まれていた空間に、それをもろともしないようなのほほんとした雰囲気で走ってくる存在が1人…ブレイ家のムードメーカーであるリリウムだ。
そのそばにはその歳には不相応にエネルギッシュな走りで追いかける老人が1人…ここ最近、リリウムとなにか秘密裏に行動していたワン・シャオロンである…とはいっても、その秘密裏の行動をブレイブは知っているが。
そしてワンの手元には何か縦に長い物体が確認できた。

「大丈夫ですか？ワンさん。」
「何、伊達に鍛えておらんよ。まだまだ長生きせねばならんからな！」

おそらく長距離を走ってきたことに心配したリリウム、その問いかけに力瘤をわざととらしく作りながら答えるワン…完全に祖父と孫である。

「…どうされた？」
「えーとね…はい！真改さんにプレゼント！」

真改の問い、それに答えを示すようにワンからワンの持っていた細長い物体を受け取り、さらに笑顔でその物体を真改に渡すリリウム…あの湾曲した鞘の形、そして柄…間違いない、所謂日本刀である。

「…これは？」
「これは日本刀っていう剣でね、今存在してる剣より斬ることに特化した剣なの！」

真改が鞘から抜くと…そこにあったのは、かつてブレイブとリリウムが生前住んでいた地球、その中の島国日本で独自に反映した剣…日本刀のすらりとした姿があった。

日本刀…日本では古墳時代から剣の存在は確認されていたらしいが、現在よく知られている日本刀の原型が大成したのは平安時代の末期以降だといわれている。

独特な特徴としては「反り」…湾曲した刀身、片刃であること、そして何より「折れず、曲がらず、よく斬れる」…と、剣として「完成」されているのがあげられるか。

おそらく手間暇が一番かかる剣であり、ここまで「美」としての要素が強く認識されているのも珍しであろう。

「…美しい。」

真改が思わず感嘆するほどの美しさ…この貴族社会、貴族へ向けて売られている儀礼用の飾り付けがされた剣、これが一般的にいわれる「美しい」の剣としての基準であろう…だがそれは美の種類が違う、それは剣が美しいのではなく、装飾されている「宝石」に美を感じているのである。

だが日本刀が違う…地球でも、その美しさには関心が多く、海外のファンが多い剣だ。

その見たことがない形の刀身、その刀身が生み出されるまでに行使される職人技…誇らしい日本文化なのだが、やはり時代が時代、刀など持っただけで御法度な現世ではあまり陽が差さないシャンルとなってしまったが、やはりすたれることはないであろう…と、ブレイブはあまり知識がないにしろ思っている。

「折れず、曲がらず、よく斬れる…剣の中でも精度が高い剣なんです！そして材料になっている金属は特製のヒヒイロノカネ！」

「！リリウム、精錬に成功したのか！？」

「うん！でも錬金だと無理らしくて、こんなに時間もかかっちゃったけど。」

そしてこの日本刀に使われている金属は幻の金属、伝承でしかその存在が確認されていない「ヒヒイロノカネ」だ。
ヒヒイロノカネ…別名「オリハルコン」、様々なフィクション物語で名前の出ている金属の名で、「仮面ライダーカブト」でも各ライダーの装甲に流用されている。
しかしその詳細は不明で、太古日本ではよく精錬されていた金属らしく、さまざまな道具に使われていた万能金属、「ダイアモンドよりも硬く、永久に錆びない」と金属としては一種の頂点で、時代が経過するにつれぷっつりと精錬されなくなった幻の金属。
失われた後も細々と存在はしたらしいが、その事実は定かではない…現代では、その伝承はフィクションであるという説も浮上し、存在すら疑われていたが…リリウムが星の本棚により検索したところ、その精錬方法が本棚にあったのである。
…リリウムの星の本棚は並行世界の情報も存在する本棚、もしかすればその情報の元手は「カブトの世界」かもしれないが、事実は定かではない。

「…ヒヒイロノカネ、とは？」
「説明が難しいけど…簡単にいえば、どんなものよりも硬くて、絶対に錆びない万能金属！ってところかな？錆びないってことに関しては固定化の魔法があるからともかく、どんなものよりも硬いからはこぼれの心配は滅多になし！これで安心だね！」

これはリリウムからの所謂「お礼」であった…いつも自分たちを守ってくれ、兄を強くしてくれている存在の1人…その存在の1人に、「守る」力を…生き残る力を与えたかったのだ。
そして思いついたのが日本刀のプレゼント…真改、という名ももと

もとリリウムとブレイブが名づけたもので、元の名は普通に「シン」であった…だが彼はなぜかこの名を嫌いっていたのだ…そこで名づけたのが「真改」…彼が剣士であったことから、ブレイブがおもむろに思い出した刀工の名である。
真改はこの名を大層気に入り、こうして自分からも「真改」と名乗るようになった。

「…大変ありがたき幸せ。お礼を出しつくていもこのご恩には対価など払えません。」
「いいんですよお礼は、ただＯＲＣＡのみんなには守る力を与えたいから…。あっ！だったらその刀に名前を名づけてください！」
「…承知。……神代（じんだい）。」
「神代？って確か…。」
「神代って言葉は私が教えたんだ！」

神代…平たく言えば、「神が統治していた時代」のことを指す。
少し前にリリウムと真改の２人で、「真改はブリミルという存在にまったく崇拝していない」という話から宗教観についての話になり、その中でリリウムが教えた言葉であった。

「…私は始祖や精霊という存在に尊敬の念はない…だが、目の前に尊敬に値する主が２人いてくれる…その２人へと捧げる名だ。…ブレイブ、リリウム、君達次世代が新しい神代を作ってくれ。」
「「…はい！」」
「…では、神代と共に気を取り直して戦おう、ブレイブ殿。」
「はい！…僕も名前をつけてみようかな？」
「あと兄さま！後でその剣もヒヒイロノカネにバージョンアップさせるから、工房まで来てね！」
「わかったよ。…では真改さん、参りましょう！」

お互いに一礼、そして構えられた両者の剣…日本刀の神代、その金属の色は鋼でも鉄でもなく、まさに「未知」、引き込まれそうな金属光沢に雰囲気は、真改の持つ剣士としての闘志に呼応しまるで一体となっているようにも錯覚した。

「はっ…！」

小さくブレイブは気合を入れなおし、剣を振り上げ真改に競り合いを挑む…考えてほしい、真改はとっくに成人を迎えた大人、比べてブレイブはたった5歳の体である…身体能力、基礎体力、すべてが劣っているブレイブが持っている唯の勝機は「とにかく短時間で押し倒すこと」にあった。

序盤から全力の勢いで攻め、とにかく相手に「攻勢」のチャンスを与えない、与えてしまったら秒単位で力によって伏せられることが目に見えるからだ。

それに体力も微塵なもの…持久戦には発展させない、とにかく「短期決戦」の心構えが必要。

競り合いはもちろん真改の勝利、攻勢の兆しが見えたところでブレイブは一端距離を取りつつ精神を集中させる…この試合では魔法の使用が認められている、つまり「これを利用しなければ勝てない」ということと同義なのである。

この試合の連続によって生み出されたブレイブのオリジナルスペル…ここで発揮する時が来たようだ。

まず唱えるのは魔法で構成された刃を作り出す戦闘用スペル「ブレイド」…これによりさらに剣の周囲に刃を構成、剣撃を強化し…そして精神力を解放させて剣の周囲にはまばゆいばかりの紫電がまとわりついている…剣撃の強化と雷による属性付加…知っているものは知っている技である。

「我は雷刃の使者、我に宿るは戦いの力、我が欲するは永遠の切り

札への道、一閃する道……ライトニング・スラッシュ！」

ライトニング・スラッシュ…「仮面ライダー剣」で出演する仮面ライダーブレイド、この仮面ライダーブレイドが得意とするコンボ技…「スラッシュ」と「サンダー」のカードをラウズすることによって発動する必殺技の1つで、電気による属性付加と剣の強化によって相手に大ダメージを与える技…それを魔法によって疑似的に再現したのだ。

完全に剣に紫電が同化し、ブレイドの魔法も紫電と同化した…これで決める、これで決められなかったらブレイブは勝てないことが確実である。

「ハァーーー…！ウェェェーーーイ！！」

お約束の掛け声を発しながらブレイブは全速力で突撃、その闘志を汲み取り真改は回避行動をせずに真改は立ち塞がった。

ぶつかり合う刃、まばゆい火花すら発しながら2人は全力の競り合いを行っていく…真改の刀を握る腕も次第に力強くなる…自分が持っているのは尊敬する主から与えられた「切り札」…しかしその持ち主が腑抜けであったら問題外、ここで…やすやすと負けるわけにはいかない。

だが精度が日に日に高くなっていっているライトニング・スラッシュ…伊達に鍛錬は積んでいない、精神力も強靭なものとなっているため、次第に真改は輝く紫電の力に押され始めていた。

だがこちらにも背負うものはある…この神代はすべてを「守る力」として与えられた…もしこれがすべてに迫る闇だとすれば、もしその闇に負けたのだとしたら…今のブレイブとリリウムはまだ5歳、いくら才があるメイジでも手慣れの戦士が何百人も攻めてきたのだとすれば…命の保証はできない。

…その時その2人を守るのは誰だ?始祖でもなければ見えない精霊

でもない…彼らＯＲＣＡだ…すべてからブレイ家を守り抜きすべてをはねのける…それがＯＲＣＡの皆の血の鉄則…誓った忠誠。
その忠誠、その志は軟なものではない、断じて…それを示すため、真改は無我の境地を探した。
壊すのではなく、叩くのではなく、この刀は「斬る」存在…その究極の一閃を探し続けた真改…その闘志に呼応し、不思議なことに徐々に…先ほどまで攻勢であったはずのブレイブの刃が、ゆっくりではあるが押され始めていた。
真改の精神はまさに透明、そしてヒヒイロノカネに映るわ己の闘志…不思議なことに、その闘志が燃え上がるのと比例に神代のオーラは強くなっていった。
…ヒヒイロノカネは生きている金属である、という記述がある…正確にはヒヒイロノカネには「オーラ」を纏っており、そのオーラが動くさまがまるで「生きている」と表現されたのだ。
…真改の持つ神代には、おそらく真改の闘志のオーラが纏っていたのであろう…そういわなければ、人外な今の真改の神代を持つ力は説明できないからだ。

「…紫電…一閃！」

それは真改の決意の言霊、すべてを一閃する闘志は、ブレイブの全力全開ライトニング・スラッシュを完全にはねのけ…

「…終止。」

はねのけられたことで地面に倒れこんだブレイブ、そのブレイブの首に神代を突き付けたことで、今回の模擬戦も真改の勝利に終わることとなった。

「…今の追い上げ、さすが真改さんです。」

「…今のは、神代が応えてくれた。神代の力の勝利でもある。」
「剣が…ですか？」
「兄さま！真改さん！ヒヒイロノカネというものはオーラを纏うといわれております！おそらくそれの効果なのかもしれません！」
「…オーラとは？」
「人の体から発しているエネルギーのことをいいます。それを発するヒヒイロノカネは”生ける金属”とも呼ばれるんですよ。」
間髪いれずに説明したリリウム…おそらく秘密裏に星の本棚を行使しているのであろうか。
「…なるほど、つまり文字通り剣が…神代が応えてくれた、というわけですか。真改さん、いい剣を持ちましたね。」
「…肯定。」
真改の神代を見る視線は喜びに満ちていたという。
――――――こうしながらも着実に準備を進めていたブレイブ、リリウム、そしてＯＲＣＡ旅団…今回のヒヒイロノカネの精錬成功は計画の大きな一歩とすることができた。
…リリウムとブレイブが様々な金属やパーツを作り出し、とあるもののプロトタイプを準備していた矢先…ヤンから、２人にこんなことを述べられた。
「…ブレイブ、リリウム。ヴァリエール公爵の二女様はご存知だろうな？」
「ヴァリエール公爵…ミス・カトレア様ですね。」
ブレイ家は子爵でありながらなぜか公爵であるヴァリエール家と友好的だ…話によれば各々の先祖の間でひと悶着あったらしいがその

詳細についてはよく聞かされていない。
というより、より詳しい詳細はお互い知らないらしいのだ…わかっていることといえば、何世代か前のブレイ家の先祖がヴァリエール家の先祖のことを助け、それ以降友好関係を結んでいるらしい。

「ああ。実は1週間後にミス・カトレア嬢の誕生会があるらしくてな…2人も5歳、そして公爵様の三女も今年で5歳…お互い親交を深めてほしい、というあちらの意向からお前達もその誕生会に招待されたのだよ。」

所謂「社交界デビュー」といわれる貴族のイベントの一つのフラグであった。
それにヴァリエール家の三女となれば…ご存知の通りルイズのことである…原作キャラとの邂逅のまたとない機会、それにあちらも魔法を習い始めている歳であるとなれば、ここでパイプを作れるのはありがたい。
このまま「ゼロ」のままで放置すれば後々扱いずらいキャラとなるのは明白、ならば早いうちに…失礼な物言いではあるが唾をつけたいところ。
…それに、何より純粋に同年代の友達ができそうなのは2人は嬉しいのである。

「「いかせてもらいます！」」
「即答か。まぁ社交界デビューにいい機会だからな。…というわけで、心構えだけは持つようにいっておこう。」
「「はい！おとうさま！」」

…1週間後、ブレイ家の双子は社交界デビューとなる。
そしてＯＲＣＡ旅団も、その誕生会においての護衛体制についての会議も1週間ずっと行われていたという。

激闘と貴族の在り方　前編（前書き）

ここでちょっくらイベントを起こしましょう。
…ブレイブは使える子だと思いたいよ。

激闘と貴族の在り方　前編

――――――そしてあの日から1週間が経過した…その1週間はとある準備にリリウムは追われ、ブレイブも相変わらず戦闘訓練に身を呈していたため、まさにあっという間ではあったが。

場所はヴァリエール公爵領内にある一番大きな湖…とはいってもブレイブとリリウムが一度だけいったことがあるラグドリアン湖と比べたら明らかに小さくはあるが、月明かりに照らされた湖はやはり心惹かれるものがある。

今回はヴァリエール公爵の二女であるミス・カトレアの誕生会…相手は公爵の家系の者、てっきり多くの人が押し寄せているのかと思ったのだが…どうも来ているのは親しい貴族だけのようで、確認してみたところ12人前後しかいなかった。

おそらくヤンの「社交界デビューには丁度いい」という言葉はこういった意味なのであったのだろうか…とにかく考えていてもしょうがないものはしょうがないのでブレイブとリリウムはお初にお目にかかる貴族方々へ挨拶にまわっていた。

礼儀、マナーというものは心得ている、転生者であるブレイブとリリウムは同年代の子供より博識で人生経験もある、しかし公爵に近しいものということで相手は伯爵や侯爵が多分であった…が、他の貴族と比べて比較的良識があるヴァリエール公爵の友人、ということで身分の低さを取り上げてくる者はいなかったことは幸いであった。

というのも、実を言うとこの誕生会メンバーで伯爵より下の身分の貴族はブレイブとリリウム達ブレイ家ととある家族しかいなかった…子爵でも近しいヤン、先ほどヴァリエール公爵と親しげに話しているところをみると結構な交友関係であるらしい。

そして何より驚いたのが…

「お初にお目にかかります…ブレイ子爵の長男、ブレイブ・ノクト・トー・ド・ブレイでございます。以後お見知りおきを。」
「同じく長女、リリウム・フリー・ド・ブレイでございます。兄ともども、よろしくお願いいたします。」
「ご丁寧なあいさつありがとうございます。…ワルド家の長男、ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルドだ。こちらこそよろしく。」
「！…ミスタ・ワルド様の長男と申しますと…閃光、ですか。名高い風のメイジだとお聞きします。」
「いやなに、偶に才を授かっただけの話さ。それにまだ当主にはなっていないのだからね、そこまで恐縮することない。」

閃光のワルド…原作では革命運動組織「レコン・キスタ」に身を投じ、裏切り者としてルイズの命を殺めようとした人物…歳を考えれば現在は15歳、まだ成人すら迎えていないこともあるであろうが、トレードマークともいえる口髭がなかったためブレイブとリリウムには一体だれかわからなかった。
…予想ではあるが、おそらく現在は裏切り者などではなく一介の貴族である、つまりは今のところは真人間、受け答えの様子をみるとまだ貴族への敵対心は大きくなっていないと思いたいが…しかし邂逅できたことは大きい、ここで認識を改めることができれば最低でもワルドの裏切りイベントが潰えるからだ。
原作ではサイトとデルフリンガーの奮闘によってルイズは窮地を脱したが、ここはいずれか物語が破壊される世界…念には念を押したいところ。
…これはあくまでブレイブとリリウムの予測ではあるが、原作開始の年までその「破壊者」はあまり大きくは動かないと思われる…介入が少なければ、そのまま「原作通り」に事が進むであろう…つまりは、おそらく破壊者が持ち要る原作知識は所謂「予言」として利用される…つまりは先手を打ちやすく、おそらく破壊者はその先手

に便乗して物語を破壊するはず…何せ原作時はハルケギニア周辺の国が崩壊する可能性を多大に持ったイベントが続発する、少しでも突けばあの原作時期の周辺国ではすぐに爆発することとなる…それだけでも破壊完了だ。

…ならばそれの逆を行動すればいい、原作時に火種となる出来事を出来るだけ潰していき、火種を破壊者に大きくさせないよう注意する…そうすれば破壊者のやることは火種を新たに作ること、火種を作り、なおかつ自分で大きくする、となるとその破壊者は大きく行動せざる負えない…それに対抗すればいいだけの話なのだから。

…あと正直に言うならば、この世界は曲がりなりにもブレイブとリリウムが住む世界…平穏が破壊されることはこの世界の一介の住人として御免なのである。

「なるほど…そのお嬢さんの髪を見てすぐにブレイ家の子供だとわかったよ。…お歳は？」

「5歳でございます。」

「となると…杖契約は済んだのかい？」

「ええ、おかげさまで無事に。」

「そうかそうか…いいかい、君たちはまだ人生経験が浅い5歳だ、だからこそ君達には大人達に流されない強さを持ってほしい。力を渇望し、時には大事なものを見落とすこともある、それは人である以上ありえない話などではない…いきなり5歳にいうのもなんなんだが、だからこそ今のうちにいっておこう…よき時代も悪い時代も、作るのはその世代の者達…君達には、よりよい時代を作っていってほしい。」

「…はい、心にとどめておきます。」

「リリウムの心に、その言葉しかしと届きました。」

「うむ…では、私は父上のところにいってくるのでな…さらばだ。」

そう言い残し、ワルドはおもむろに、だが静かに去って行った。

…この言葉は確かにブレイブ達の心に響いた、ハルケギニアの次世代の貴族達の子供には絶対に心にとどめておきたい大事な言葉…この志を持ったワルドは、１１年後に裏切り者となり、その汚名を背負ってまで聖地と力を求めるようになってしまった…悲惨である。だがワルドの本質は理解した、おそらくあそこまで聖地と力を求めたのは、この歳に余りに純粋で気高い希望を持ち、しかしその希望が「貴族の醜態」によって歪められてしまったのであろう…腐りかけた貴族社会の犠牲者の１人であったのだ…そしてその犠牲者は次の犠牲者を生む、悲しいかな。

…いや、腐りかけた、というのにも甘いかもしれない。

「…リリウム、どう思った？閃光のワルドとの邂逅は？」

「…きれいだったよ、あの人の言葉。…でも時ってそれすら汚すんだね。」

「…汚すのは時間じゃない、時代さ。…それじゃあ、そろそろミス・カトレアの元までいってみようか。準備はできてる？リリウム。」

「もちろん！精魂込めて作ったプレゼントだからね、自信作間違いなし！」

「…でもほとんどはリリウムに任せっきりになっちゃったね。」

「ううん！あの色は兄さまでしか絶対に出せない！だから２人の共同作だということは絶対に間違いないんだから！」

「ありがとな。」

そう、本日お呼ばれされたこの集会は先述のとおり「ミス・カトレアの誕生日」であるから…誕生日、でいわれれば所謂バースデープレゼントを準備することはある意味強いられてるのと同義。

２人は１週間でプレゼントを急ごしらえしたのだが、こういった物の制作はリリウムの特技、そのためブレイブの出番はないと思われていたのだが…「兄さまにはとっておきの大仕事！」とリリウムが気を利かせてくれたおかげで、本当の意味でブレイ家の双子からの

プレゼントとすることができた。
そうして2人が人の間を潜り抜け、一番人が密集してる場所へ向かうと…案の定、今回のパーティの主役であるミス・カトレアがおしとやかな笑顔で鎮座していた。
座っているのはおそらく体の調子が悪いからか、だが外出している、ということはまだそこまで症状が悪化していないと予測できる。
…ヴァリエール家の二女カトレア嬢、ヴァリエール家の一番の良心とも呼べる存在であり、原作では不治の病に苦しむこととなっている、身分という概念に確執せず、平民であったルイズの使い魔の「才人」相手にもまごころから接した存在…また異様に勘が鋭いことでも有名。
その姿はヴァリエール家特有のピンクブロンドの血を引き継いでいる近しい色で、その様子はリリウムに負けず劣らずおっとりとしている…似た者同士、とブレイブは心の中でつぶやき、リリウムはそんなブレイブをよそにその華麗さに同性として感心していた。
幸いにも何か話に踏ん切りがついたのか周りの人だかりは分散し、ミス・カトレアの周りにはヴァリーエル公爵を残すだけとなった…この機会を逃すことはない、ゆっくりと2人同じ歩合で歩み寄り、ミス・カトレアとヴァリエール公爵に形式的ながらも良識的ではあろう挨拶を述べた。

「お久しぶりでございます。ブレイ家長男のブレイブ・ノクト・トー・ド・ブレイでございます、赤子の時に少しばかり可愛がってもらったようで、あの時は大変お世話となりました。」
「同じく長女のリリウム・フリー・ド・ブレイでございます。兄ともども、私も大変お世話となり、大変光栄でございます。」
「うむ、久しぶりであるな。…しかしあの時の子ももう5歳か、大きくなったな。」
「いえ、自分達はまだ幼少の身、まだ社会の一部すら理解できておりませぬ一介の子供でございます。」

「いや、その受け答えだけでも立派なものだ、まぁ、私達とブレイ夫妻の間柄だ、そう硬くならなくてもよい。」
「初めまして、お父様の二女であるカトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールです。以後お見知りおきを。」

依然にこやかに笑顔で自己紹介をしたカトレア、その趣はまだ１３歳という若い身であるためか抜けぬ幼さを感じる雰囲気もあったが、やはり同年代のものと比べればおとなしい部類といえるか。
そしてプレゼントの前座に、ブレイブが余興の言葉をほんの軽く述べる。

「本日はミス・カトレアの生誕１３年の日とお聞きし、粗品ながらも２人で祝い品を支度いたしました。気に入ってもらえれば誠に幸いです。」

そう言葉を切ったのと同時に、リリウムが膝をつきながら懐から四角形状のものを取り出す。
その正体は木箱、もちろんこれ自体がプレゼントなのではなく、その中に祝い品なるものが鎮座している。
カトレアはその箱を興味ありそうな視線で見つめ、しっかりと受け取ったのちに木箱の蓋を開けると…その中身にあったのは宝石らしき石のネックレス、それもただの宝石ではないとカトレアは持ち前の勘の良さで感じ取って、一層と興味を抱いた視線でその宝石を見つめて一言。

「…金色と水色の半分こ…きれい。」
「その石はこちらで作りました。水の精霊の涙を媒体に、その下地へと水属性の魔法の力と雷の力を込めたのでございます。左の金色は私の雷の魔法が、右の水色はこちらのリリウムの魔法によって色

が完成されています。」
「水の精霊の涙…とは、何とも金のかかっているアクセサリーですな。」
「そして金属部分のチェーンは…ブレイ家が独自に冶金した特殊な金属のヒヒイロノカネが使用されています。その金属は現存する金属を超える硬度を持っておりますので、そのアクセサリーは劣化することもないでしょう。」
「…それはまた、とんでもない金属を作り上げたものだ。…それに雷の力、ということは…ミスタ・ブレイブは風のメイジとお聞きしましたが…。」
「…鍛錬と、ご指導してくださった方々のおかげで、なんとかライトニングを唱えるまでに至りました。」
「その歳でライトニングをか！これまた、ヤンも才のある息子を持ったものだ。」

まず宝石、というより水の精霊の涙の改造品、イメージは「仮面ライダーW」のルナ・トリガーのカラーである…水の精霊の涙である理由は、ヤンの伝手から二女のカトレアが最近体の調子を悪くしている、と聞いたリリウムが気を利かせた結果考え付いたもの、しかしただそれを渡すのも面白みがないので、短期間で出来るような改造を考えた…その結果たどりついたのは、石の中に属性魔法を封じ込めることで彩色を施すこと、ならびに、水の魔法と雷の魔法によっての効果増幅…これだけでは治癒など出来るはずがない、だが癒しの力の根底にある水の精霊の涙、その涙に祈りを込めた…これで少しでも症状が楽になってくれれば幸いである。
そして5歳でライトニング習得はやはり驚かれた…ライトニングというのは風の上位スペル、さらに制御も難しい部類であるので、魔法と触れ始めてから1年すら立っていない子供が習得することはまずない、まさに才はある…それは、ブレイブの本当の属性は雷なのであるから制御は容易である。

だが表向きは風ということにしてもらっている…史上2人目と予測される雷属性のメイジ…稀有な才能というものは、周囲に危険をさらしてしまう面を持つものである…虚無の使い手然りだ。
そして目の前にいるカトレアも風のメイジ…その言葉には純粋無垢な笑顔で関心を寄せていた。

「まぁすごい！私でさえまだなのに。」
「しかし経験の浅い身、メイジとしての本質的な実力はまだあなた様には至りません。」
「いいえ、あなたも父のような高名なメイジとして名をはせられるはず、だって、こんな素敵なプレゼントをくれたのですもの。」
「彩色は半分自分が行いましたが、ほとんどの基はこちらのリリウムが行ってくれました。称賛の言葉でしたら、ぜひ我が妹に。」
「リリウムさんも、こんな素敵な宝石をありがとうございます。」
「ミス・カトレアがお体の調子を崩した、と父の伝手で聞いたものですから、ぜひ癒しの祈りが伝われば幸いなのですが。」
「あなたがたの真心の祈りは絶対に伝わるはずです。これからも仲良くしてくだされば幸い。よろしくお願いします。」
「「光栄です。」」

効果はともかくカトレアが大層気に入ってくれた様子を見て、2人は外面でも心中でも喜びに満ちていた。
その後はちょっとした談笑を交わし、無事に邂逅を済ませた後カトレアとブレイブ、そしてリリウムは一端わかれる、まだ見ないヴァリエール公爵の三女…ルイズとあってほしい、と公爵自ら頼まれたからだ。
残念なことに長女のミス・エノレオールは本日は欠席しているらしい…このころから「アカデミー」とかかわっていたのであろうか？
しかし公爵いわく残念そうにしていたそうだ。
そんなこともありルイズの姿を2人は探したのだが…いかんせん

の姿は見つからない、あそこだけ生えるピンクブロンドだ、いくら子供の丈でもあっても気付くはずなのだが…と、ブレイブが人ごみの間を移動していたときに、ふと右の方向からなぜか爆音が聞こえた。

ブレイブは風の発展型である雷のメイジ、根本は風であるため音の類には敏感なのである…おそらく方向から考えてそばにあるさらに小さな湖からか…爆音、見えないルイズの姿…もしかしたら、とブレイブは考えリリウムを手招きし、そのまま音の聞こえる方向へと歩いて行った。

…そばにある双子湖の小さな湖、そのほとりに月明かりに照らされ映えるピンクブロンドの長髪…そしてその少女が杖を振るうたびに何かが爆発する。

相次ぐ、爆発、爆発、爆発…ライト、と唱えれば小石が爆発し、フォース、と唱えればまた小石が爆発する…フライ…は、もう結果が見えているため少女は唱える気にはなれない。

ガサ…

しかし溜息を吐く少女の少し離れた藪が音をたてて揺れた…思わずはっとして振り向くと…そこには見慣れない同年代の顔が2人明かりに照らされていた。

「きゃっ！…ふぁ、びっくりした…あなたたちは？」

「お手数のところ、さらにはいきなりこんなところから失礼…お初にお目にかかります、ブレイ家長男のブレイブ・ノクト・トー・ド・ブレイでございます。」

「同じく長女のリリウム・フリー・ド・ブレイでございます。あなた様の父からいわれ、あなた様を探していた所存であります。」

「ブレイ…ってことはヤンおじさまのところの…ご丁寧なあいさつありがとうございます、ヴァリエール家三女のルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールです。」

最初はいきなり姿を現されたためか少々焦ってはいたが、公爵の娘として兵善を取り戻し挨拶を交わすルイズ…性格はまだ丸い、おそらくまだ「ゼロ」というレッテルを貼られていないころからだと思われる。
先ほどの爆発の連続…そこから、ブレイブは言葉を紡いだ。

「…誠に失礼なこととは存じていますが、つい、ミス・ヴァリエールの…おそらく魔法の練習を見てしまったのでありますが。」
「うっ！見ちゃったんだ！…そう、どうも私魔法の実技だけは覚えが悪くて、正直、こうやってパーティまで抜け出して練習しないと、…厳しいって、いうか。」
「…失敗、とは、先ほどのように魔法が爆発することを指すのですか？」
「…そうよ。ライトを唱えても爆発、ディテクトマジックで調べる前のその物体は消し炭になるし、ましてや自分に掛ける魔法なんて想像もしたくない。…そういえばあなたも今年でメイジなのよね？どんな感じなの？」
「…私はまだ未熟な身、自分で言及できるほどの実力には至っておりません。…魔法の御指導をしてくれる人物はなんと？」
「…おそらく失敗からの結果、だとはいわれてるけど…。」
「失敗、ね。…メルツェル！」
「はっ…。」

ブレイブの呼びかけに即座に答え、藪から音も発せずに登場したメルツェル…子供たちの護衛を仕事とするＯＲＣＡ旅団は、絶賛護衛中であった。
それも子供たちの初の社交界、ヤンの気合の入りようといったら…正確には、ヤンとワンの気合の入りようと言ったら。
もちろんトップ２であるメルツェルも、ブレイブ達のいちばん身近で偵察を続けていた…そしてもちろん、ブレイブとリリウムはそれ

にずっと気付いていた。

「…おそらくメルツェルと考えていることは同じ、だろうな…。ミス・ヴァリエール、まず他のメイジが魔法に失敗した場合、知識ではどう認知しているでしょうか？」

おもむろに質問するブレイブ、これはおそらくルイズは座学には一層と力を入れているであろう、と思い投げかけた質問だ。
その予想はドンピシャ、間髪いれず、ためらいなくルイズは記憶にある知識をそのまま述べる。

「…普通は、何も起きない。」
「そう、本来ならば何も起きないのが正解なんです。…ですが、あなたの魔法、あわやコモンマジックですら爆発へと変わってしまう。」
「失礼ですが、一度なんでもいいですから魔法を唱えてみてください。少しばかり水の調べを使いたいので…。」
「水の調べ？」
「私のオリジナルスペルです。…失礼しました、私、ブレイブ様とリリウム様の魔法指導を担当しておりますメルツェルと申します、以後お見知りおきを。」
「え、ええ。……ライト。」

ライト…本来ならば、光源を発生させ今のような夜の空間を照らす魔法…なのだが。
ボォン！
その杖の先にあった小石は爆音を立てて爆発してしまった。
やはりか、と失望し続けるルイズをよそにその詠唱の間ずっと杖を向けていたメルツェル…彼はその水の調べによって流れる情報を見ながら、深く思考を張り巡らしていた。

ＯＲＣＡの賢人といわれる彼…彼の博識で名高い脳は、閲覧できる限りの記憶、知識を覗いていく…そして一つの仮説を打ち立てたメルツェルは、ルイズに言葉をつづけた。

「まず一つ…詠唱や魔力の流れ自体は、まったくと言っていいほど相違ありません。」

「それは先生にもいわれたわ。」

「ですが爆発してしまう…と。…あくまで仮説なので、あまり身構えずお聞き願います。…あなたが適性を持っている属性が、仮にも…土、水、火、風、すべての属していない、と聞けば、あなたはどう思いますか？」

「ど、どれにも？」

「そうです。まず、魔法を失敗して爆発という事象が起きる…このこと自体ありえないのですよ。あり得るのだとすれば、土の魔法によって火薬を錬金し、火の魔法によって着火することでの爆発…しかしあなたの魔法は土の錬金もしていなければ、火による着火も行っていない。しかし爆発は起こる…もしかすれば、あなたの属性は四属性ではなく、あなたのオリジナルである、といえるかもしれません。」

「オリジナルって…氷とか、物語に出てくる…雷とか？」

「それは根本に四属性が根付いているもの…それらとは違い、完全に四属性から外れたものだと思われます…あなたの資質は非常に素晴らしい、ですが何かの形で横やりが入っているのですよ。…ではミス・ヴァリエール…いきなりながらも、この場であなたさまの魔法の指導をさせてもらえないでしょうか？」

「ここで！？でも時間も…。」

「すぐに終わります。何せ覚えてもらう魔法は一つだけですから。…しかし、その魔法を覚えればあなたはメイジとしては大きく躍進できることを約束しますよ。」

「ほ、ほんと！？」

「お約束します、しかし覚えるのはあなた…では、実演してみせましょう。」

メイジとしての大きな躍進、という売り言葉に目を輝かせたルイズ…やはり公爵の娘として、貴族の娘として色々と思いつめていたこともあるのであろう…たった5歳で身分としての自分に心を苦しめられる…子供にはきつい、それは性格が少しばかりひがんでしまうのも納得だ。

始祖ブリミル…はるか昔にこの地に現れ。この世界に「魔法」という概念を広めた崇拝されし者…だがその始祖はミスを犯している、とブレイブは思っている…それは、「後世への責任放置」自分の与えた知識でどうにかなる、と思っていた始祖の油断だ。

確かに豊かにはなった、この世界の一部の人間に理に介入する術を与えた…だがあまりにもアフターケアがなっていない…始祖でも不死ではない、ただ与えることと導くことは徹底的に違う…このことを理解していなかったのが残念なところだ。

…メルツェルは実演と言い、ふとそばにある湖に向け杖を振る…すると湖の水は唸りを上げ、なんと水で構成された竜がルイズの目の前に現れた。

その大きさメイルほど…だがメルツェルは事前にサイレントの魔法をかけていたため、会場にはその轟音は聞こえていないであろう。

メルツェルは器用に杖を振り。、水の竜をルイズの周りで踊らせて見せた、その様はどこかの地方の日本の祭りを彷彿とさせた。

終わりに、とメルツェルは杖を再び湖に向け、その竜を本来あるべき姿である水に戻す…その様は圧巻、いいショーを見れた、とルイズは思わず拍手を送る。

「すごいわ！…でもあの魔法、スクウェアクラスでもないと…。」

「いえ、練習次第であなたもできますよ。さすがにあの大きさまではどうかはわかりませんが…。」

「ほんと!?」
「肯定です。…私が使っていた魔法はオリジナルスペルでもなんでもありません、使ったのは念力…フォースです。」
「嘘!?でもあれはウォータ・ウィップに近かったわよ?」
「…これは私の完全なる持論ですので考えるのは各々勝手ですが…ミス・ヴァリエールは考えたことはありませんか?なぜ魔法によって人は浮くのか?なぜ魔法によって水をまるで鞭のように操れるのか?なぜ人は風を操れるのか?」
「なぜって…精霊の力が…。」
「…それが教科書の答えです。ですがそれで思考停止するのはいかんせんいい傾向ではない。私はその先をもっと求めてみたかった、だから私は魔法というものを完全なる学問の視点から追い求めていた。…そこで私は様々な理論を打ち出してきた、そのうちの一つが…念力の存在による魔法の基礎構造です。」

その先はブレイブとリリウムも聞いた売り文句だ…念力によって火も操れるし、風も、はたまた水や土も操る、この念力による操作で火や水を特定の形に成型し、火球や土球を操り、水や火の鞭を操れる…こんな教え方をする先生などどこにも存在しない、聞いたことのない授業にルイズの人間としての「知識欲」が刺激されたのかルイズは目を輝かせて、今まで異常に素直な様子で聞き入っていた。

「…つまり、極端な話ですが、念力を限界まで極めればトライアングルの一部までは再現可能な魔法なんです、もちろん状況や環境にも限定されますが、ですが本来の魔法より精神力の負荷を少なく抑えながら、トライアングルレベルの魔法が可能となる…たとえば。」

と、メルツェルは再び杖を振ると…今度は1．5メイルほどの土人形を形成して操って見せた。

「目の前にはラインレベルのゴーレム…しかし私は水専門のメイジ、土に関してはドットどまりなのですが、こうして念力の操作を極限まで極めればこうしてゴーレムを疑似的に再現できる。」

「すごい！っていうことは、念力が得意になれば、四属性の魔法だって疑似的に使えるようになるわけ！？」

この理論のすごいところはまさにそこ、確かに周りに火や土があることなど条件はあるが、条件がそろえば限定的に四属性の操り手となれる…夢のような話。

しかし理論は単純…ただただ念力を極めればいいだけの話なのだから…とはいってもメルツェルのあのレベルまで行き着くのは骨が折れる、なにせ土を人型の形に念力で抑えつけながら、さらに念力によって部位を動かしている…こればっかりはまさに極限ともいえよう。

だが初歩の魔法であれば再現は可能…たとえばフライ、風の初歩魔法であるが、あれは単純に自分の体を念力によって空中に浮かせて動かせばいい。

土の攻撃用スペルのブレッド、これの場合はただ土を球体上に念力によって固定し、念力によって打ち出せばいい…まさにバリエーションは無限大。

しかしメルツェルレベルまで達するのは大変…しかしメルツェルはあえてこれをルイズに教えた…ルイズには素晴らしい資質がある、覚えることさえかなえばおそらくその資質であれば自分並みのレベルまで念力を極めてもらえると思ったからであろう。

「…本日はこれで課外授業は終了にしたいと思います。なにぶん思ったより時間もかかってしまいましたから、ミス・ヴァリエールは公爵家の三女、長時間欠席すればお父様も心配なさるでしょう。」

「とってもいい授業になったわ！…今度、出来れば念力の練習、付き合ってもらいたいのだけれど。」

「…ヴァリエール公爵に確認してみましょう。少しばかり面識はありますから。…ブレイブ様とリリウム様ご一緒に、という条件がありますが…。」

「やった！同年代の子なら大歓迎よ！」

ブレイブが一緒、というのは本職はブレイブとリリウムの指導担当だから、及び護衛のためだからか…しかしルイズとのパイプも作れたことは感謝していた2人であった。

…だが、迫る影はもう…足元まで迫っているものである。

メルツェルがサイレントの魔法を解除しルイズに気に入られたためか会場までメルツェルとルイズ、それにブレイブとリリウムが時々会話に参加する、という形でゆっくり戻っていたとき…。

「！…3人とも御隠れください！」

「「「！！」」」

メルツェルからの言伝、そしてメルツェルの気迫からただごとではない、と察した3人はいわれたとおりに大木の影に隠れると…視線の先には…。

「（カトレアお姉さま！？それにお父様やお母様まで！？）」

数十人もの黒と白のマントの集団に、剣と杖と突き付けられ動けずにいたパーティ参加者達の姿があった。

激闘と貴族の在り方　前編（後書き）

本日の名言
「人を汚すのは時間じゃない、時代だ。」
大昔に近所のよくお小遣いくれたおじいさんからいわれた言葉です。
…なぜ今覚えてるかは知りませんが、この言葉が染みわたる世になっちまいましたね。

激闘と貴族の在り方　後編（前書き）

激闘？パート。
ブレイブ大活躍…だといいな。

激闘と貴族の在り方　後編

…数十人と推測された謎の白の黒のマントの集団、マントにでかでかと描かれている杖と剣の交差するエンブレムは、どこか理想じみた構図ではある。

状況からして…まず、カトレアとヴァリエール婦人…ミセス・カリーヌの背後と前面にそれぞれ剣としても利用できる軍用の杖を持ったものが背後に1人、前面に1人…そしてほかの貴族には背後に杖、前面に剣を持ったものが同じように配置、おそらく杖を持っているものはメイジであることは予想される。

…この状況が出来上がった理由は、おそらく明らかに手慣れであるメイジが2人ついているカリーヌとカトレア…この2人にまず人で抑え、その後この2人を脅迫材料にそれぞれ貴族を硬直させていった…とい順序を踏んだのであろう。

カリーヌ…原作では戦いにおいて右に出るものはいない、知るものぞ知る烈風のカリン、その風はすべてを吹き飛ばし、偏在において相手を惑わせた…しかし首に突き付けられているのは軍用の杖、スペルを唱えようとした瞬間首が吹っ飛ぶことは間違いなし…典型的なメイジ殺しの手口である。

「…白と黒のマント…それにあのエンブレム…あいつら、レイブンか。」

「知っているのか?メルツェル。」

「…手慣れのメイジ殺しや、傭兵メイジを統括した組織”レイブンズ・ネスト”に所属するメンバーのことを畏怖を込めて裏の世界ではそう呼んでいるのです。白の者はメイジ、黒の者はメイジ殺し、そして白の黒のマントは各々の隊の長…軍用の杖、ということはあのミセス・カリーヌとミス・カトレアに張り付いている者は軍出身のメイジでしょうな。」

「嘘!?なんでみんなが!?」
「…おそらく、様子を見るにミス・カトレアとミセス・カリーヌが目的のようですが…ミス・ルイズ、何か心当たりはお有りで?」
「いきなり言われても…でも、公爵家っていうだけで十分な理由になると思うから。」

ルイズの言及はまさにその通り、公爵の権力が邪魔である、と認識している貴族はおそらくいるにはいるであろうから。
それに貴族を極端に恨むもののターゲットにも恰好だけはいい、もしかすれば金目的でもあると予想されるが、そういった傭兵集団は大体依頼人の依頼によって動いているのがほとんどである。

「そんな!?お母様のお腹の中には子供がいるのに!?」
「「…え?」」
「…今日、サプライズでみんなに発表しようとお母様がいっていたの。けれどこんなことになるなんて…。」
「「…えええ!?」」

…ブレイブとリリウムはこの世界に生を受けてから一番驚いた…ブレイブは冷静に確認する、まず長女のエノレオール…いる、二女のカトレア…もいる、そして隣に三女のルイズは…もちろんいる。
…まさか4人目の子供…こんなところで原作ブレイクをしているとは全く思っていなかった。
というよりこれはいわゆる「おのれ〇〇ーーー!!」と叫ぶべきところなのだろうが、今回ばかりは世界の破壊者は関連していない。
…男か女かは知り得ないが、どちらにせよ原作とまったく同じ方向には絶対に向かないだろう…と、記憶の書き換えを行うブレイブとリリウムなのであった。
本当はもっとおどろいておきたいところなのだが…いかんせん状況が状況、とにかく事を片づけてから話し合ってみよう、と双子らし

く思考をシンクロさせているブレイブとリリウムであった。
クールにいきましょう…ブレイブはとにかくメルツェルに戦況の確認を行っていた、こんな時こそのＯＲＣＡ旅団である…なにせ主であるヤンが危険にさらされているのであるから。

「…メルツェル、人員は？」
「…ＯＲＣＡのメンバーがもう配置しています。おそらくまわりには相手側の予備の人員が隠れている…それを討伐してから行動に移るかと…。」
「順当だな…だが誰かに被害が被った場合は、容赦なく僕が介入する。」
「！ブレイブ様！それはいけません！あなたはブレイ家の次期領主！あなたをお守りするのが私達の生きがいなのです！しかしあなたから火中に飛びいることは…！」
「…もし、の話だ。それに僕には一撃離脱の策はある、離脱は容易だからこればかりは許してくれ。…僕にも、ちょっと扱いにくいが意地がある。剣をふるう力を持ちながら、目の前で人が苦しむ姿を見るのはのちの後悔となる。…私は、どんなものでも、人がこんな茶番で傷つくのは許せぬ…！」
「…ブレイブ様…。」
「それは私だって同じ。兄様も守るし、みんなを守るのが貴族…人の上として君臨せねばならぬものの責務です。それはＯＲＣＡのみんなだって一緒…ダメだよ、みんなだけが危険な目にあうなんて…。」
「それに僕達には…。
「「越えなければならないものがある！」」
…それが正義の誓い、一介の人間が、それも５歳の子供が語るには早すぎる正義の志…それは無謀、しかし無謀ともいわれる子供にも宿っている力…それが魔法。

その魔法…貴族、メイジの存在意義とは？…貴族とは人の上に立つ者、しかしその意味を履き違えるのは愚者…人の上に立つものとは、下々の者のすべての責務を負い、そして下々の者を守る…魔法、とは、そのための力にすぎなかったはずであった。
…しかし世界はそれを歪めた、しかしその歪みに同調したものは愚者としかなれない…ブレイブとリリウムはそれに抗う意思を持つ、仮面をかぶりし戦士の魂…その魂が、人としての足踏みを許さない。

「…あくまで何者かに危害が被られた場合、としてください。…責務はＯＲＣＡが追います。」
「！メルツェルさん…。」
「…ＯＲＣＡの使命はあなた方を守ること、そして…尽くすこと。」
「…感謝支局。…ではミス・ヴァリエール。」
「は、はい。」
「あなたはしばらくこの場所で待機をお願いします。もし自分達が動くこととなれば、あなたは僕達が動いたのと同時にメルツェルの指示する方向まで走ってください。ＯＲＣＡのみんなが、あなたの安全を確保します。」
「私はともかく！あなたたちはどうするの！？いくらメイジでも、相手はメイジ殺しに元軍属のメイジなのよ！？」
「…待っていて…ください。」
「…へ？」
「僕達を…待っていてください。いつ僕達が死にに行くなんて言いましたか？」
「私はメルツェルさんと兄さまがいるから大丈夫！逆に巻き込まれそうなあなたが心配なんです。」
「…巻き込まれる？」
「…正直、僕の近くにいると…大変なことに。…とにかく、あなたは信じて待って下さい。それがあなたにできる最善の選択肢、そして僕達が願う選択肢。…ミス・カトレアの来年の誕生会には参加し

たいですし、ミセス・カリーヌの子供…私達もみたいですからね。」
「…お願い…死なないで。」
「「…もちろん。」」
「私が全身全霊でお守りいたします。」

正義を信ずる主、尽くす忠臣…理想的な主従関係は時に強固なる意思を生む。
…そして、事態とは常に予想外である、ということをルイズは次に起きる事態によって学習せざる負えなかったのだ。
…拘束されているなかのメンバーにはもちろん閃光のワルドも含まれている…貴族全員は万全策として杖を没収されているが…戦いの心得あるワルドは、袖の中に予備の杖を忍ばせていたのだ。
ワルドは若いながらも風のスクウェアメイジ…策としては、迅速なるスペル詠唱により偏在を作り出す、その偏在の同時攻撃によって不意を突き一網打尽…と、考えられた策ではあった。
…だが甘かった、彼はまだ１５歳、原作では１年後に軍属となるワルドであるが、しかし今は一介の貴族…その画策には「相手は第二の杖の存在を知らない」という事前条件があることを軽視してしまっていたのだ。
…さらにいうならば、この場にいるのは経験豊富なメイジ殺しや傭兵メイジ…もし、その行動をしようとしている、と事前に考えられていたのなら…結末は…失敗。

「…閃光のワルド。」
「…なんだね。」

ワルドを拘束しているうちの黒のマント…剣の使い手であるメイジ殺しの１人が、ワルドの目前でワルドの…行動に感づいていた。
名を呼んだのと同時に袖口から取り上げられる第二の杖…しまった、とワルドが思った時には…時すでに遅し。

「第二の杖、か…。いい心構えだ、知略的だな、だが…無意味だ。」
ズシャァッ！！
「うぐぁぁぁぁぁーーーーーーー！！」
無慈悲に振られた銅の剣は…ワルドの左手を持ち主の体から離れさせ、その傷口からはおびただしい鮮血が吹き出されることとなった。
「きゃあああああ！！ワルド様ァ！！」
響くルイズの悲鳴…だがリリウムが感づいてサイレントの魔法をかけてくれたおかげでこちらのことはばれずに済んだ…だがルイズの幼い精神にも、そして鮮血などまともに見たことがなく、果てには人の腕が両断される瞬間など見たくもないブレイブは吐き気を抑え、リリウムは泣き出しそうな目で悲鳴を抑えながらも失神しそうな精神をぎりぎり水面下まで抑えていた。
そして行動のトリガーである「人への危害」という条件がこの時達成されてしまった…ワルドの腕が一つとなったのを代償に。
「メルツェル！容赦はなしだ！」
「…はっ！…ＯＲＣＡ旅団、行動開始！」
『了解！』
メルツェルのＯＲＣＡ起動を示す言葉…その言葉と共に、包囲を秘密裏に進行していたＯＲＣＡメンバーが一斉に戦場へと踊り立った。ある者はメイジ殺しを神速の太刀で斬り伏せていき…ある者はゴーレムによりすべてをなぎ倒し…あるものは周辺の木ごと燃やしつくし…そして水のメイジは、怪我をしたものを確認及び救出のために貴族達を誘導する…杖を持っていない貴族はただの人間なのである。
そしてブレイブも…精神力を統一することで先ほどの惨劇の恐怖を

振り払い、スペルを唱え始めていた。

「我は雷刃の使者！この雷刃の意思はすべての正義を守るために！
サンダー・ブレ・ブラスト……スピード！」

これがオリジナルスペルの１つ…脚を電磁加速させることで一時的に神速とも呼べる速力を手に入れるスペル…スピード。
しかし電磁加速…つまり加速にしか使えないというのがメルツェルの教えている水属性の魔法との相違、だが単体でも速力向上を行えることを発見したリリウムには感謝した。
これはリリウムの星の本棚の知識から流用し、参考としたのだ。
迅速の速さを手に入れたブレイブ…その影は未だ貴族を拘束し続けるものたちの背中を確実に斬り捨て…失血によるショックを利用して相手をみな気絶させていった。
…だがブレイブは一端魔法を解除した…メルツェル式能力強化魔法との相違はまだある…身体能力自体を上げるそれとは違い、これは足を電磁加速によって無理やり早くしているだけなので５歳の体には負担が大きいのだ。
しかし少しばかり止まった後はまだ神速の動きを続ける…捕捉されれば一瞬で殺される…それを理解しているからである。
その様まさに一閃…ＯＲＣＡのものに負けず、不意の大量の人員による襲撃によって動揺しているうちにブレイブはレイブンを切り刻んでいく。
とにかく死んでくれないでほしい…情報源にもなるし、何より人殺しまでにはまだ覚悟が足りない…それがブレイブの甘さでもあり…そして一種の強さでもある。
…その一方、リリウムはその心を恐怖で支配されかけていた。
目の前で起きた惨劇、その鮮血は記憶から離れることはない、そして今…レイブンと呼ばれている者が真改の剣によって同じ鮮血を出している…これが戦場。

生きるものと死ぬもの、究極の両面性を両立させている危険な域…鮮血が飛ぶ中も走り、ひたすら剣をふるう真改…その顔は、まさに獣。

しかし誰のために獣となっているのであろうか…誰のために剣をふるっているのだろうか…皆はいってくれた「ブレイブとリリウムのため」であると。

ブレイブはいっていた、「人の上に立つ貴族としてあるべき姿…それは人としての全員分の責務を追い、なおかつ力で守り通すこと。魔法はそのためにある」…ならばこの状況で魔法にできることは何なのであろうか?燃やしつくすこと?巨人で薙ぎ払うこと?違う…それは経緯でしかない。

その行為によって何が結果として残るか…それは「誰かを守ったこと」…その結果のために皆は剣と杖をふるっているのだ。

…ならば私も杖を振るおう、殺すためじゃない、血を見るためじゃない…守り通すため。

自分を守ってくれている者達を…守るため。

「水、その存在に祝福を与えたまえ。水、その力は変化と不変を司るもの…イル・ウォータル・グランデ・ブースト…。」

イメージするのは水…しかし今のレベルではあきらかに何かが不足してる・・それは体との密着性。

確かに体内に水は存在する、生物に潤いを与え、その生命に輝きをもたらす…しかし今のレベルでは自分の実力には見合わないはずの魔法…だが、ならば代わりを…もうひとつの何をを探せばいい。

人が集まればどんな大きな力にもなる…ＯＲＣＡのみんなと一緒に過ごしたことで学んだことがそれ。

…忌々しい、あの血なまぐさい色と臭い…だがそれが頭に強く残ってしまったことで結果オーライとなったのだ。

水と同じぐらい密着している液体…血、その血のめぐりをイメージ

してみると…明らかに今までとは違う手ごたえ…いける、リリウムには確かな実感があった。
対象は…真改、その勇ましいヒヒイロノカネの剣「神代」と真改に神速の力を…。

「…マッハ！！」

…その瞬間、真改は無意識にスズメを狩る鷹となっていた。
その剣、まさに鬼の如く、その真改、まさに隼のごとく…それを見守っていたフィオナ、メイジとして、人としての成長を感じ取ったフィオナは、凛々しい顔でリリウムの背中をさすった。
フィオナの手に気づいたリリウム…だがその温かさは、どこまでも飛べるような勇気をもらえたのだ。
…粗方レイブンも片付き、残党も掃討していっている…さすがＯＲＣＡの精鋭達だ、と賛辞を述べようとした瞬間、あることに気付いた…ＯＲＣＡのフィオナとアナトリアによってルイズとリリウムは保護された…だが気付いてみてほしい、あのレイブン達が目的であったと思われるカトレアとカリーヌの姿が…全く見えないことを。

「メルツェル！ミス・カトレアとミセス・カリーヌは！」
「…やられました。私はミスタ・ワルドの治癒にまわっていたもので…不覚です。」
「いや、今からならまだ…音を聞く…風を読み取る…。」

風のメイジとしての「音に敏感」な能力…これでこの場から離れていく足音を見つけることができれば…と、ブレイブは最大限の精神集中を行っていると…見つけた。

「およそ１１０メイル先！くそ、これはかなり早い！…ＯＲＣＡ旅団！手の空いている者は僕と同行してくれ！」

『サー！』

人員が集まったことをすぐさま確認し足を走らせたブレイブ…メンバーは真改とシャミア、それにアナトリア…頼もしいの他はない。この状況で本当は電磁加速…スピードが使いたいものだが、いかんせん体への負担が大きい…やはり連続使用は控えるべきであった、と反省するブレイブ。

…そしてその集団に高速で追いかける小さな影が１つ…その影はブレイブの隣に姿を…リリウムの姿を現した。

「リリウム！？…強化魔法を習得したのか？」

「…人間って、火事場の馬鹿力が本当にあることを今日知った。…特に、あんなことが起きて私はずっと泣き出しそうになってたけど…フィオナさんが勇気をくれたから。」

「そうか…。！リリウム、俺にマッハの呪文、最大限の！メルツェルさんは俺のキック力に上乗せを！」

「…わかった。」

「キック？…了解しました。」

「「水、その存在に祝福を与えたまえ。水、その力は変化と不変を司るもの…イル・ウォータル・グランデ・ブースト…。」」

「マッハ！！」

「キック！！」

「サンダー・ブレ・ブラスト…スピード！！」

多少の無茶は承知の故…と言い訳を心の中で言いながら、ブレイブは極限の強化倍増を試みる…速力は最大、ブレイブの影は一瞬にして音に準ずる速さとなり、その一閃は１００メイル先でカトレアとカリーヌを抱える影を補足した…相手は熟練者、だからこそ容赦はなし。

真改との戦いでもそうだった…経験が多い相手から勝利をもぎ取る

には、短期決戦の一撃必殺でしかない…だとすれば、この必殺技ほどふさわしいものはない、とブレイブは判断したのだ。
纏う電気、そして超高速の走力、キック力のブースト…「キック」、「サンダー」、「マッハ」の3枚のカードをラウズすることで発動する仮面ライダーブレイド通常フォームの最大必殺技。

「ライトニング…ソニック!!…ウェェェーーーーーイ!!」

感じる電磁加速に悲鳴を上げる足の苦痛、しかしこれが終わってからいくらでも治癒してやる、と自分の心に言い聞かせ、無理やりコントロールをもぎ取る。
カリーヌとカトレアを抱えている4人には大きなミスがあった…この2人を拘束したところで安心し、2人を抱えるという行為によって手をふさいだこと…つまり杖を持たなくなったこと。
いくら超高速で迫ってきても気配は感じるであろう…しかし杖での補足はまず無理、そして補足したときには…とっておきのキックが顔面にせまっているであろうから。
2人を抱える4人に瞬時にヒットしたライトニング・ソニック…その電気滴る蹴りはクリーンヒットへと至り、4人の意識は刈り取られることとなった。
それを確認し、ブレイブは電磁加速を解除…と、同時に限界突破した足の疲労によって足は使い物にならなくなってしまったためブレイブは重力に任せ顔面ごと地に伏せることとなった。
かすかに気を失ってなかったカトレア…おそらく一番の危険因子であるカリーヌには十分にスリープ・クラウドの魔法をかけておいたのだろう…カトレアは地に伏した英雄の元へと駆け寄る。

「大丈夫ですか!?ブレイブ様!!」
「…ちょっと足が根をあげちゃったらしくて…すいませんミス・カ

トレア。…少しだけ、腕を…お貸しください。」

もちろん、疲労というものは足だけにあらず…電磁加速というものは前身にかけるもの、つまりは足が中心ではあるが体全体にも負荷はかかってしまうのである。

さらにブレイブにとっては初めての実戦…人を助けるために幼い体はやんちゃには程遠い無茶をして、人を癒すオーラを放っているカトレアの腕の中に安堵を求めたのであった。

そして体が次の求めるアクションは…睡眠、人というものは眠ることで内なる癒しを求める…雷刃の英雄は、その閃光を放った直後に幼子の顔を取り戻すのであった。

カトレアの腕の中で寝息を立て始めたブレイブ…その様子を見て、のちに気がついたカリーヌ、そしてＯＲＣＡメンバーとヤンは急いで水メイジの魔法による治癒を急ピッチで始めた。

そして２日後の朝…出血によって気を失っていた１人の犠牲者のワルドと共にブレイブは意識を覚醒させた。

混乱は大人達の仕事

――――――可愛い娘の一人であるカトレアの誕生会…本来であればとても有意義なものとなり、丁度ワルド子爵とも今後のことについて話し合い、花を咲かせていたヴァリエール公爵一同…しかし運命は無常、カトレアとカリーヌの背後に現れた白の黒のマントが特徴の謎のメイジ…それも動きが完全に「メイジ殺し」の動きであった。

目的は不明であるが、カトレアと、さらには烈風であるカリーヌさえあっさりと拘束され、参加していた貴族一同は拘束の身となる。この危険な状況下、ということで公爵が気がかりであったのがこのパーティの参加者の1人である三女の可愛いルイズ…彼女はまだ5歳、それも魔法も少し実技で後れを取っている…つまり対抗策はないも同然、できればこの場に居合わせていないといいが…という公爵の願いは通じたようで、ルイズは会場内に姿はなかった…万が一の時も考え、公爵は安堵の溜息を吐いた。

だが自分たちの身を拘束した集団のマントのエンブレムを見て公爵は驚愕した…杖と剣が交差した黒、白のマント…あの特徴的なエンブレムは間違いない、メイジ相手を中心に仕事を受け持つ暗部の傭兵集団「レイヴンズ・ネスト」のメンバー…となれば「レイヴン」以外あり得ない。

レイヴン…まるで闇夜に紛れたカラスのように、音もなく、影もなく、魔法を行使できるはずのメイジ相手に場合によっては秒単位の暗殺すら可能なメイジ殺し集団…とんでもないものに目をつけられた、と公爵は絶望した。

…目的は、最初に手をつけたことを考えてカトレアかカリーヌ…病弱気味なカトレアを拘束しても、烈風として名をはせていたカリーヌ、片方でも拘束すればすぐにこの場にいる貴族は太刀打ちできない…それを両名とも、となるとまさに硬直以外の選択肢はなかった。

とにかく公爵が願ったのは「負傷者、死亡者なしでこの事態を切り抜けること」…理想論ではあるが、これ以上何も望むものはない…そうただ始祖に祈る公爵。
…しかし、運命は惨劇をその直後に駒として置いていた。

「…閃光のワルド。」

突然呼ばれたとある青年の名…閃光のワルド、風すら追い越す速さで登場し、強大なる風の力を操る優秀なスクウェアメイジ…カリーヌほどではないが、それでもトリステインのメイジの中でも１０本の指に入る優秀さと有望さを持つ青年…しかしなぜその名を呼んだか、公爵は疑問を持った。
…そして直後に理解してしまった、レイヴンの１人が持っているのは杖…おそらくワルドの持っていた第二の杖であろう…ある程度戦いの教養ある者はたまに第二の杖を持つ者がいる…メイジにとっては杖は命、この存在あってのメイジなのだから。
相手が山賊や亜人であったらこの策は十二分の通じていたであろう…だが相手はメイジ殺しのプロ…こういったパターンはもう何十回でさえ経験しているのだ。

「うぐぁぁぁぁーーーーーーー！！」

木霊してしまった若い青年の悲鳴…そして月明かりに照らされたのは美しい湖などではなく…血に溜まる鮮血の血だまり…そして投げ捨てられた青年ワルドの腕…そして鮮血が滴る銅の剣。
…次世代の輝きが…目の前で消えようとしていた。
もちろんパーティメンバーは大パニックだ、目の前でこのような大惨事を目の当たりにする…この時、本当にルイズがいなくてよかったと思っているのは心の隅、今やるべきことはとにかく状況を打破し一刻も早くワルドを助けることであった。

…不幸ながらも、あそこまですっぱりときれた腕は完治するころは不可能であろう、なにせ二の腕すらない…これから彼が歩む未来に陰が見えてしまった。
…そしてヴァリエール公爵が無謀ながらも動こうとした直前であった。

「ＯＲＣＡ旅団、行動開始！」

突然何者でもない男の声が響き…そしてその刹那、レイヴン達の体から…先ほども忌々しいほど見てしまった鮮血の雨が吹き出していた。
それだけではない…とてつもない炎で構成された巨大蜘蛛、すべてを薙ぎ払う見たことのない金属で構成された巨大なゴーレム、そしてそれと同時に乗り出し、拘束されていた貴族達を誘導し始めた者たち…行動は迅速、手慣れ達が味方に付いた、これだけはこの時理解できた。
そして先ほど声が響いた方向に顔を向けると…まったく変わらない旧友の顔が…何年かぶりに会えた旧友の顔があった。

「メルツェル！？オッツダルヴァ家のメルツェルか！？」
「…お久しぶりですヴァリエール公爵。」
「まさかこんな時に再会することになるとは…！兄は！？マックスはいるのか！？」
「今現在はおりません、しかし兄上も元気でございます。」
「…そうか。…私はてっきり、ロマリアに殺されたものだと…。」
「…デマを流したのは私です。」
「…なるほど、相変わらず抜け目ない、といことか…。！もしやこのメイジや傭兵たちは…！？」
「…ＯＲＣＡ旅団といいます…説明は後！今はあの後両名をお助けになることが！」

「いない！どこにいったんだ私のカリーヌ！カトレア！」

突然消えてしまった公爵の愛しき妻と娘…そしてその直後にどこからか少年の声が聞こえたのは気のせいではなかった。

…声の主はブレイ家長男のブレイブ、様子からしてこれからあのカリーヌとカトレアを拘束していた４人を追うらしい…あの時ついては行きたかった…だがどうしても、目の前に放置できない人物が１人。

…どこかのメイジらしき女性に励まされている…号泣するルイズの姿だ。

「どうしたルイズ！？怪我をしたのか！？」

「…ヴァリエール公爵様。どうやら何か目の悪いものを見てしまったようで…。」

「…！お前、まさかミスタ・ワルドのことを！？」

「ウァーーーーン！！ワルド様ァァァーーーー！！」

…なんということになってしまったのだ、と公爵は嘆いた…まだ５歳になり少ししか過ごしていないルイズに、心の大きな傷を作ってしまったのだ。

しかも目の前では母と姉がさらわれたという負の連鎖も相まって…

とにかく追いかけようと私が臨戦態勢を作りながら走ろうとしていたとき…ブレイブが走って行った道から、とある掛け声が聞こえた。

「すいません！至急水のメイジを御呼び下さい！直ちに！」

公爵の心はさらに荒れすさんだ…おそらくカトレアかカリーヌのどちらかに、あるいは両名になにかあった、そう思うしかなかったからだ。

相手が相手、使っている杖が軍用出会った時点で拘束していた四名

が軍属であったことがはっきりとわかったからだ…軍属のメイジにただで済むはずがない。
そう公爵はルイズを抱きしめながらルイズと、何より自分の心を励ますしかなった。
…だが考えは一瞬で変わった。
…運ばれたのは鮮血で汚れているカリーヌとカトレアではなく…とある人影に必死な形相で声をかけているカトレアとカリーヌ、それに皆…そしてその倒れている人影の正体は…ほかでもない、ブレイ家の長男のブレイブであった。

――――――翌日の夜、あの襲撃の事後処理も一端目途がついたところで、その日参加した貴族達による会合が行われた。
被害の確認、各々の情報網からのあの襲撃の裏にある事情…だが今回の場合は被害の確認がほとんど…あの襲撃の裏についてはまったく確認が取れなかった。
わかっていることと言えば「おそらくあの場にいた貴族の誰かを狙ったこと」、「その標的はヴァリエール、特にカリーヌかカトレアの可能性が高いこと」、「金でなびく傭兵集団が襲撃、ということはおそらくこの襲撃を依頼した真犯人がいるであろうということ」。
どちらにせよ心地のいい話では全くない、おそらくヴァリエール家系を狙った襲撃だと思われるが可能性としては自分たちが狙われている可能性がなくならない…それは誰だって嫌そうな顔となる。
そして何より被害の確認だ…被害とはいっても…結論からいえばまず死者はいなかった、これはまだ喜ばしいことではある。
テーブルが壊れ、何人かが軽傷を負い、少々ばかり領地が荒れた、そして何人かの貴族の杖が紛失された…これに関してはまだ平然な顔でいることができる…だがこの次があまりにも悲惨であった。
いかにも辛辣そうな顔でヴァリエール公爵は述べた。

「…しかし、この襲撃によって多忙な若者の左腕が…失われてしま

った。」

「…どうして、私の息子が…。」

嘆いているのはほかでもないワルド家の当主…いわばジャンの父親だ。

軍系である父は基本こんなように悲哀の感情を表には出さない厳格な人物…しかし自慢の息子のことであればこういうふうに悲しんでしまうのは仕方ない…周りの貴族たちも、いくら子爵という低い身分の家族の出来事であっても同情は仕方のないものであった。

何せ罪を犯してもいない、それも有望で、立派な志を持った貴族が…こういった理不尽な形で未来が奪われてしまった…命はある、だがあるはずの腕がないこれからの生活…生き地獄。

義手はある…だが同じ腕同然に動かせる義手があればすぐにつけてやりたいが、そんな始祖が作りそうな便利アイテムなど存在しない。

会議室に流れる負を空気…それに耐えきれる人間などではない。

この空気を払しょくしよう、とヴァリエール公爵は話題をシフトした。

「…しかし、死者を出さずに事態を収束に向かえたのも、あの謎の集団と勇敢なブレイ家の長男どののおかげ、いやはや、なんとあの子には感謝すべきか。」

「…しかし、あの謎の集団はなんだったのでしょうか。あの魔法、おそらくただのメイジ集団ではないと思われますが？」

…と、質問を投げかけたのは…あろうことかブレイ家の当主、あの話題の集団の持ち主であるヤンだった。

…あれの存在に関しては完全なる秘匿、正直あの軍団は子爵が持つには過ぎる力だからである。

その質問は予想していた、とヴァリエール公爵はせきをひとはらい、そして言葉を紡ぐ。

「…あれはおそらくＯＲＣＡ旅団です。」
「…ＯＲＣＡ…旅団…！聞いたことがあります、どこにも属さず、統括者の一つの理念によって動く最強の暗部組織！最強クラスのメイジから名高いメイジ殺しまでが在籍しているという…あの！？」
驚嘆の声を上げる１人の貴族…ＯＲＣＡ旅団、この名前自体は裏では有名だ。
だがまったく詳細はつかめない、さらには神出鬼没なため存在事態すら疑われている暗部組織、一種の都市伝説の類だ。

「…名は知りませんが、あの隊のリーダーらしき人物からそう聞きました。」
「ＯＲＣＡが関わっている…しかし襲撃に備えていたような動きであった。…もしかすれば、旅団はこちら側の味方なのか？」
「いや！油断させて漬け込む可能性も否定できん！」
「しかしあの方達がいなければ死者出ていたはずだ！」

貴族間で起こった二文化…ＯＲＣＡ旅団を味方と捉えるか敵と認識するか…だがここはヴァリエール公爵の鶴の一声によって、最終的に「現時点では無害な組織」という認識がなされた。
…だが中立の方が正直動きやすい、でないと最重要任務である「ブレイブとリリウムの護衛」に支障をきたす可能性があるからだ。
…だが、メルツェルから聞いた話では「公爵とはパイプがある」ということなのでそれを利用して情報操作は行ってもらう。
…だがヴァリエール公爵であったら聡明な判断ができる方なので、最悪ばれても問題なしとヤンは思考していた。
この話題を最後にこの場は解散、なにぶんヴァリエール邸で貴族の皆は宿泊していたため、急いで各々の領地へ帰って行った。
…ワルド家とブレイ家は、まだ連れて帰らなければいけない家族を

待っているためその日もヴァリエール邸で過ごすこととなったが。

――――――襲撃時間から2日後の早朝、まだメイドですら活動していない朝という概念が合うのかわからない時間帯…ブレイブは疲労感を感じながらもふかふかのベッドから意識を覚醒させた。

だがいかんせん寝すぎたためか、今の自分の状況がいまいちつかめなかったこともあったが、少しばかり時間をかけると完全に状況を理解した。

まず自分はあのレイヴンと呼ばれる輩からカトレアとカリーヌを助け出し、その後カトレアの腕の中で意識を失った…おそらく朝が近い深夜とは認識できるが、はたしてあの日から翌日だったのか、それとも一日中寝てしまっていたのか…それは自分のそばで転寝しているリリウムから起きたときに聞くとしよう、とブレイブは大体の状況把握に成功した。

…そして、隣で左腕があったはずの部分を包帯で巻かれているワルドの様子も、だ。

ワルドの様子はだいぶ危なかったであろう…まず血色が悪い、これは完全に血が不足しているからだ、あの状況ではさぞかし大量の血を流してしまったことか。

…そしてワルドの左腕…があったはずの空白、これに関してはブレイブは唇を噛みきらんばかりにかみしめた…もしあの時、自分がもっと早く行動に移していれば、あの左腕があった部分は空白ではなかったのではないか…とも幻想した…だがハイパークロックアップなど使えるはずがない…すなわち過ぎたことは本当にどうしようもならない。

…ブレイブの記憶が正しければ原作のルイズの結婚式混乱のさなかで才人に左腕を斬られていたはず…罪人であるなら擁護しようがない…罪に懺悔は必要、そして代償も必要…その危険意識によって人たちに牽制しているのだから。

だが今のワルドはどうだろうか?今のワルドはまっすぐとした志を

持つ立派な貴族であった、力に確執せず、５歳であるブレイブとリリウムに、まっすぐな目で、真剣に教え説いてくれた。
…今の彼はまだ罪人ではない…なのに運命は「罪人」ワルドと同じ運命をこの１５歳という若さで背負わせた…世は非常、そして不平等…少なくとも運命は個人のハッピーエンドは望んでいないようだ。

「…ん…。」
「…おはようございます、ミスタ・ワルド。」
「…ここは、ヴァリエール邸の客室…！！」

意識を覚醒させた途端に左腕を確認するワルド…必死に、まるでひな鳥がえさを求めているときの小さな翼の震えのようにワルドは必死に右腕を振る…空白となった左腕を探しに。
…そしてない左腕と自分に巻かれている包帯を感じ取った瞬間…ワルドの瞳は絶望に染まってしまった。

「…夢では…なかったのだな。」
「…覚えていらっしゃいますでしょうか？」
「…鮮明に覚えている。血の味もした、人には耐えきれない苦痛も確かに感じた…そして今、それを許容せよ、という言伝も聞こえたような気がした。」
「…すいません、あの時、私はタイミングを見計らって戦況を見ていた。その時に不意に起こってしまった…銅の剣が降られた瞬間、私は後悔しました。あの時よりほんの何秒か飛び出していればあなたの腕はあることとなっていたか、あの時私の行動は正しかったのか。…でも考えても無駄だ、と理解しました…それはもう、過去として存在するだけ。」
「…しかしあの時５歳であるお前が飛び出せば…すぐに蜂の巣となっていただろう。むしろ私が…う、腕を斬られ、斬られた時に……あの集団にはかすかながら隙ができた…そして何物かは知らんが介

入者が来た…私の腕一本で、命が救えた……これで……いい。」

…その後のワルドの顔は、ブレイブには見るに耐えられず、ただただ横になり虚空を仰いでいるだけであった。

…そして早朝、やっとメイド達が大急ぎで走り回っている足音が聞こえ始めたその最中…ちゃっかりと、ブレイブのそばで不貞寝していたリリウムが起床。

そして…目の前で活動をある程度しているブレイブの姿を見た。

「…に、兄さま…。」

「…おはようリリウム。…少し寝すぎたかな？」

「…もう、もうもうもう…兄さまぁ！」

あまりにもとっておきなサプライズにリリウムは耐え切れずブレイブにハグ、その後はまさに神速でヴァリエール家の人達やヤンを呼びに行った。

…だがブレイブは足が全く動かない、という感覚になれるのにはもうしばらくかかった。

どうやら足の疲労は生半可なものではないらしい…占めて完治まで３週間、まさにひどい肉離れであった。

…そして各々すごい顔をした大群が、客室のドアを一斉に開いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9124z/

Round ZERO　【ゼロとWな転生者】　《試験投稿中》

2012年1月10日04時45分発行